

べっふ なかじま
別府中島遺跡

2000年 3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市上郷地区は飯田市街地の北に位置し、天竜川河岸から木曾山脈前山の麓までの東西に細長い範囲を占め、川沿いの平坦地から段丘面・扇状地等に比較的広い耕地が広がっています。そうした地形を活用して原始、古代における先祖の営みは、縄文、弥生、古墳、歴史時代にと枚挙にいとまがない程です。中でも古代社会においては律令の官道東山道の飯田松川渡河地点として、古代伊那郡衙の座光寺恒川遺跡へ通じる交通の要衝に位置づけられます。しかし、それらは地中に埋蔵されている特性の為発掘調査により解明するより術はございません。文化財に関する認識、技術は日進月歩であり、できる限り現状のまま後世に伝えることが望ましいわけではありますが、同時に私たちは今、現実社会に生きる人間としてよりよい社会や生活を求めていく権利も尊重すべきであり、日常生活の様々な場面で文化財の保護と開発という相容れない事態に直面する事が多くなっています。こうした事態に対して、発掘調査を実施して記録にとどめるという文化財保護の観点から次善の策を取らざるを得ない事も生じるわけです。

今回、別府中島遺跡内に長野県土地開発公社から県職員宿舍建設用地造成工事の計画が出されました。本遺跡は平成9年の試掘調査で縄文時代から弥生時代にかけての集落の様子が確認された遺跡です。それゆえ、関係各方面との協議等の結果、工事実施に先立って緊急発掘調査を行い、記録保存を図ることになりました。

調査結果は本文で述べられているとおりではありますが、今回の調査で縄文時代前期・弥生時代後期の集落の様子が明らかになりました。調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となると確信しています。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただいた隣接地の方々をはじめ、本調査に関係された全ての皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成12年3月

飯田市教育委員会

教育長 富田 泰啓

例 言

1. 本書は長野県土地開発公社が実施した上郷地区職員宿舍用地造成工事に先立って実施された、飯田市上郷「別府中島遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市教育委員会の直営事業として実施した。
3. 調査は、平成10年度に現場作業、平成11年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施に当たり、基準点測量・写真測量・空中写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業に当たり、BNJを一貫して用いた。なお、今次調査区の中心地番である2241-2を略号に続けて付した。
6. 本報告書の記載順は竪穴住居址を優先した。遺構図は本文とあわせ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
7. 土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
8. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により福澤が行った。
10. 本書の執筆と編集は調査員の協議により福澤が行い、小林正春が総括した。
11. 本書の写真は福澤が撮影し、遺物写真の一部は西大寺フォト杉本和樹氏が撮影した。
12. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
13. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序			
例言			
目次			
第I章 経過		第III章 調査結果	
1 調査に至るまでの経過	1	1 調査の方法と概要	8
2 調査の経過	1	2 遺構と遺物	8
3 調査組織	2	第IV章 まとめ	
第II章 遺跡の環境		参考文献	19
1 自然環境	3	報告書抄録	39
2 歴史環境	3	奥付	40

挿図目次

挿図1 調査遺跡位置図	5	挿図7 SB06	11
挿図2 調査位置および周辺遺跡地図	6	挿図8 SB07	11
挿図3 基準メッシュ図区画調査位置	7	挿図9 SD・SK	13
挿図4 SB08	9	挿図10 西側調査区周辺柱穴平面図	15
挿図5 SB05	9	挿図11 東側調査区周辺柱穴平面図(1)	16
挿図6 遺構全体図	10	挿図12 東側調査区周辺柱穴平面図(2)	17

遺物図版目次

第1図 SB08	20	第6図 遺構外出土遺物(1)	25
第2図 SB08	21	第7図 遺構外出土遺物(2)	26
第3図 SB05・SB06	22	第8図 SB08・SB05・SD01・SK04	
第4図 SB07・SD01	23	遺構外出土遺物	27
第5図 SK03・SK04	24		

写真図版目次

図版 1	調査区全景……………	29	図版 7	SB05・SB06・SB07……………	35
図版 2	SB08・SB05 同炉……………	30	図版 8	SB07・SD01……………	36
図版 3	SD01・SD02・SD03・SD04……………	31	図版 9	SK03.04・遺構外……………	37
図版 4	SB06・SK01・SK02・SK03・SK04……………	32	図版10	遺構外・SB08・SB05・SK04・SD01 遺構外……………	38
図版 5	重機作業風景 調査風景……………	33			
図版 6	SB08……………	34			

第Ⅰ章 経 過

1 調査に至るまでの経過

平成9年9月29日付、9土公第240号にて、長野県土地開発公社 理事長 植田稔昌より上郷地区職員宿舎用地造成工事に係る埋蔵文化財発掘調査について、文化財保護法第57条により通知が提出された。当該地は埋蔵文化財包蔵地別府中島遺跡の一面に位置し、縄文時代から中世の集落の存在が予想される地である。

そこで双方協議の結果、用地内において試掘調査を実施し、遺構の有無を判断することとした。そして平成9年10月27日、試掘調査についての委託契約を締結し、同11月4・5日に重機により試掘調査をおこなった。

その結果、縄文時代の竪穴住居址と考えられる遺構が1軒、弥生時代の土坑が2基確認されたため、本発掘調査をおこなって記録保存の措置を講ずることとした。

2 調査の経過

関係者による諸協議を受けて、平成10年5月6日本発掘調査についての委託契約を締結し、同年6月4日に現地での発掘調査に着手した。

まず、重機により表土剥ぎ作業をおこない、基準点設置作業を実施した後、作業員による遺構検出作業を開始した。そして、竪穴住居址・溝等を検出し、掘り下げて精査し、写真撮影をおこない、空中写真撮影を㈱ジャステックに委託して作業をおこなった。

遺構については、測量作業を順次おこない、平成10年8月11日現地での作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理作業、出土遺物の水洗・接合・復元作業、実測・写真撮影作業、遺構図の作成・トレース、版組み等を行ない、平成11年度に報告書作成作業にあたった。

3 調査組織

調査担当者	山下誠一 福澤好晃					
調査員	佐々木嘉和	吉川 豊	馬場 保之	吉川 金利	澁谷恵美子	
	伊藤 尚志	下平 博行	坂井 勇雄			
現場作業員	新井 幸子	伊坪 節	伊藤 孝人	井上 恵資	太田 沢男	
	岡田 直人	岡田 紀子	北原 裕	木下 貞子	木下 義男	
	木下 力弥	熊谷 義章	熊崎三代吉	小島 康夫	小平不二子	
	佐々木一平	清水 三郎	下沢 和央	代田 和登	杉山 春樹	
	瀬古 郁保	田中 薫	田中 博人	仲田 昭平	樋本 宣子	
	福沢トシ子	古林登志子	牧内 修	正木 重子	松下 省吾	
	松下 省三	松下 成司	松下 光利	三浦 照夫	柳沢 謙二	
	吉川 正実					
整理作業員	新井ゆり子	池田 幸子	金井 照子	金子 祐子	唐沢古千代	
	木下 早苗	木下 玲子	小池千津子	小平 晴美	小平まなみ	
	小林 千枝	小林 理恵	斉藤 徳子	佐々木真奈美	佐々木美千枝	
	佐藤知代子	関島真由美	高木 純子	高橋 恭子	田中 薫	
	筒井千恵子	中沢 温子	中田 恵	中平けい子	林 勢紀子	
	林 ひとみ	原 昭子	平栗 陽子	福澤 育子	福澤 幸子	
	牧内喜久子	牧内 八代	松島 直美	松本 恭子	三浦 厚子	
	宮内真理子	森藤美和子	森山 律子	吉川 悦子	吉川紀美子	

事務局

飯田市教育委員会博物館課

- 小 畑 伊之助 (博物館課長)
- 小 林 正 春 (博物館課 埋蔵文化財係長)
- 吉 川 豊 (" 埋蔵文化財係平成10年度)
- 山 下 誠 一 (" ")
- 馬 場 保 之 (" ")
- 澁 谷 恵美子 (" " 平成11年度)
- 吉 川 金 利 (" ")
- 福 澤 好 晃 (" ")
- 伊 藤 尚 志 (" ")
- 下 平 博 行 (" ")
- 坂 井 勇 雄 (" " 平成11年度)
- 牧 内 功 (" 庶務係 平成10年度)
- 松 山 登代子 (" " 平成11年度)

第Ⅱ章 遺跡の環境

1 自然環境

飯田市上郷地区は、長野県の南端を南北に並走する赤石山脈と木曾山脈の間にある飯田盆地のほぼ中央に位置し、飯田市の北部にあたる。

東は天竜川を挟み喬木村に、北は土曾川で座光寺地区と境を接する。南は野底川を挟んで飯田市街地、飯田松川を挟んで県・松尾地区となり、西は風越山と接する。

伊那谷の基本的な地形は、天竜川の流れに沿ったほぼ南北方向への断層段丘地形を特徴としている。

上郷地区は、この天竜川が東端を南流し、その氾濫源を含め5～6の段丘面で形成されている。それらは、高位と低位とに大別でき、その境は飯沼諏訪神社を中心とした段丘崖である。

高位段丘の標高は、650～500m前後で、ローム層に覆われた台地である。低位の段丘は、前述の段丘崖下から天竜川までの間の上郷地区の大半である。この中に5～6面の小段丘があり、それぞれ2～5mの比高差がある。標高は380～430m程度である。それぞれの段丘面の広さは一様ではないが、いずれも南北方向の段丘崖が確認でき、段丘崖直下には湿地が確認できる場合が多い。しかし、大段丘崖からの小河川により、小扇状地が形成されている場合があり、その部分では段丘崖の把握は困難となっている。また、これらの河川や段丘崖の湧き水により、低位段丘は全体に水利は良い。

気候面でみれば伊那谷は比較的温和であり、平均気温は13℃に近く、降水量も年間1,600mm程度である。低位段丘は、後ろに段丘崖を背負っているため、冬の北風から守られる格好になっていることも温暖な要因の一つにあげられる。

別府中島遺跡は、野底川の低位段丘の中段に位置しており、段丘崖に平行して北西方向に細長く伸びている。段丘縁から連続する微高地と、上位段丘崖下に広がる湿地よりなっている。

2 歴史環境

上郷地区の遺跡を概観すると、天竜川・野底川氾濫源及び段丘崖を除いてほぼ全面的に包蔵地であり、大正13年鳥居龍蔵博士が『下伊那の先史及び原始時代図版』を編纂するのに先立ち、市村威人氏と郡下を探訪してから特に知られるようになった。戦後は市村・大澤和夫両氏を中心に『下伊那史第二・三巻』、『信濃史料第一巻』及び『全国遺跡地図長野県版』を刊行する課程で、上郷地区内の遺跡や古墳を明確にしてきた。

昭和50年代に入ると、この分布図をもとに今村善興氏が『上郷史』で、また岡田正彦氏が『長野県史考古編』で遺跡分布図一覧表の作成にあたった。中でも昭和57年度には、上郷町教育委員会が調査主体者となり、遺跡詳細分布調査を実施し、平成5年度に飯田市と合併した後、平成7年度に飯田市教育委員会による市内遺跡詳細分布調査がおこなわれている。

上郷地区の遺跡を概観すると、その大半が複合遺跡であるが、旧石器時代の遺構・遺物は現在のところ確認されていない。当地区最古の文化は、上段の姫宮遺跡出土の表裏縄文土器と、同じく黒田柏原遺跡（柏原A遺跡）出土の石器剥片・宮垣外遺跡出土の尖頭器などにより、縄文時代草創期からその黎明

を知ることができる。縄文時代早期になると、比較的山麓の八王子遺跡など5遺跡より、押型文土器・繊維を含む条痕文土器・燃糸文土器が出土しており、平成元年度西浦遺跡発掘調査において概期の住居址が確認されている。

縄文時代前期の遺跡は、姫宮・日影林・黒田大明神原など8遺跡があるが、いずれも上段の中位段丘から低位段丘Ⅰ地帯であり、下段の飯沼・別府地域からの発見がなく、沖積地帯への進出はなかったと考えられてきたが、昭和62年度矢崎遺跡発掘調査において前期後半の竪穴住居址が確認され、見直しが必要となった。

縄文時代中期になると、低位段丘Ⅱ地帯の南条面下段を除き、上郷地区全域に遺物の散布が確認されており、人々の生活の舞台が拡散したことを示している。しかし縄文時代後・晩期になると、遺跡は極端に減少し、特に後期では上段を中心として8遺跡、晩期では3遺跡が認められるのみである。

弥生時代前期は遺物が少なく、中期になって遺跡数が増大する。特に、南条面に立地する飯沼棚田遺跡は、県下初の弥生時代の水田址が発見されたことで有名である。また概期遺跡の大半は、下段の飯沼・別府地籍に集中することから、低位段丘Ⅱ地帯にみられた湿地帯を利用しての稲作が類推される。

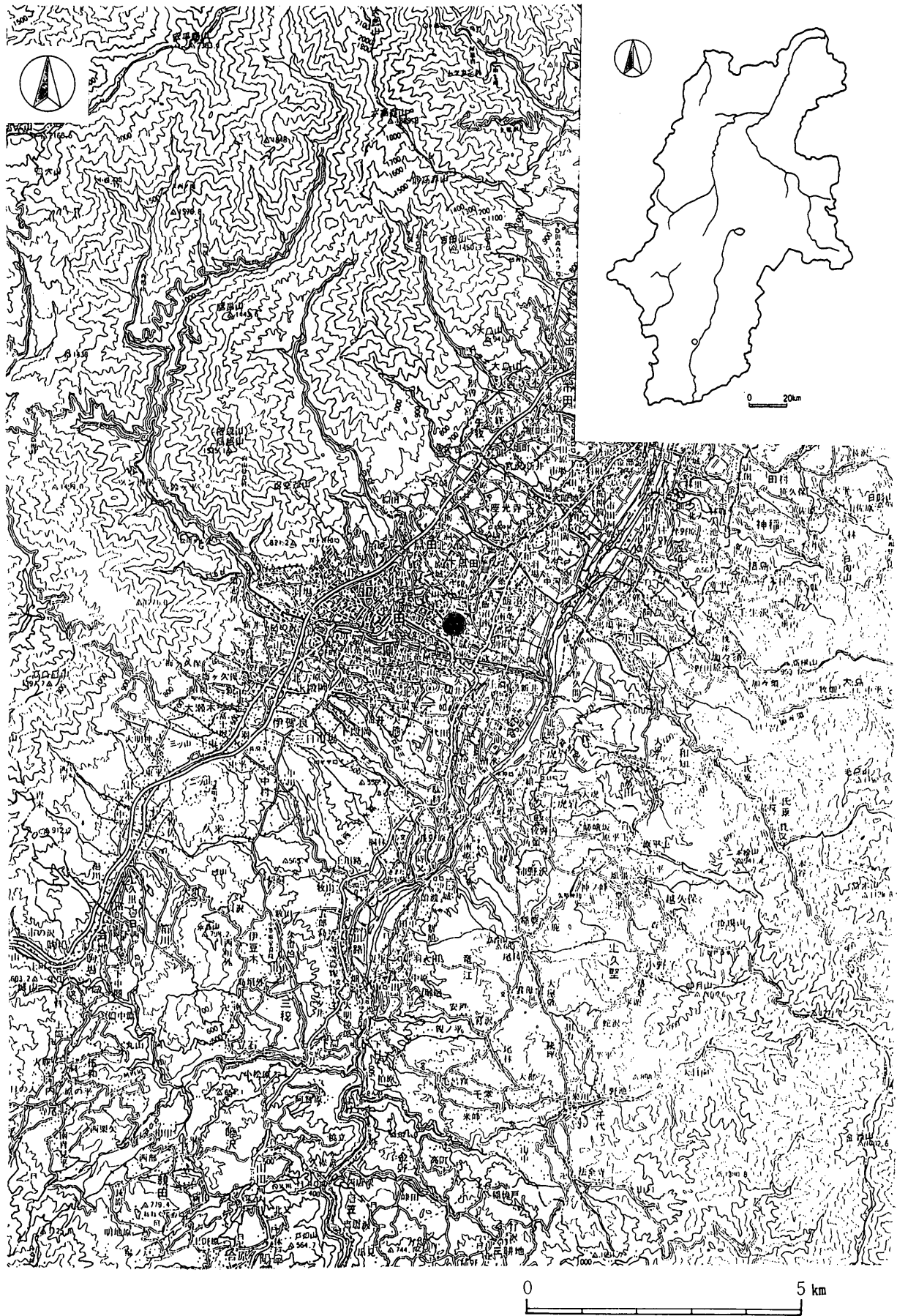
弥生時代後期になると遺跡数はさらに増加し、山麓地帯から天竜川氾濫原にまで、その広がりを見ることができる。

古墳時代になると、上郷地区にも数多くの古墳を構築した痕跡が確認される。現在のところ煙滅した古墳を含めてこの地区には36基が確認されており、その多くは別府地籍の台地端に立地する。特に、平成9年度に実施した溝口の塚古墳発掘調査では、未盗掘の竪穴式石室が確認されており、伊那谷でも有数の古墳構築地域である。集落は現在までのところ上段には見られず、下段の経済基盤の豊かな地域を中心に展開していたものと考えられる。

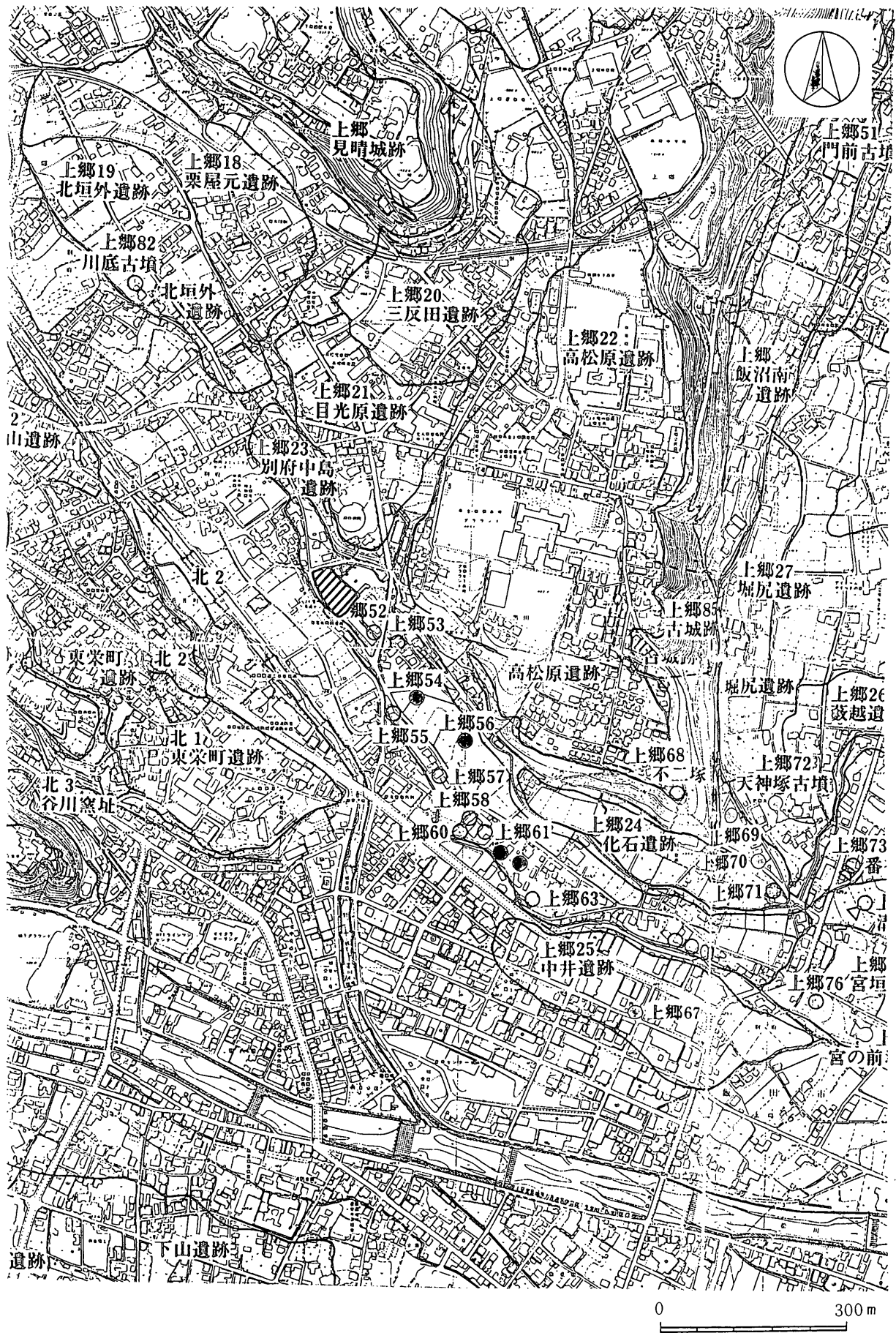
奈良・平安時代の遺跡数は60数カ所を数え、ほぼ地区内全般で見ることができる。中でも昭和62年度の矢崎遺跡発掘調査では、平安時代の大規模な住居址が確認され、また鍛冶遺構の検出等により、上郷地区内でも重要な遺跡となっている。

この低位段丘Ⅱ地帯は、古代伊那郡衙址の座光寺地区恒川遺跡群と同一段丘上に立地し、古代条里遺構の存在が地割り・地名から推測される地帯であり、古代史研究上注目すべき地域である。

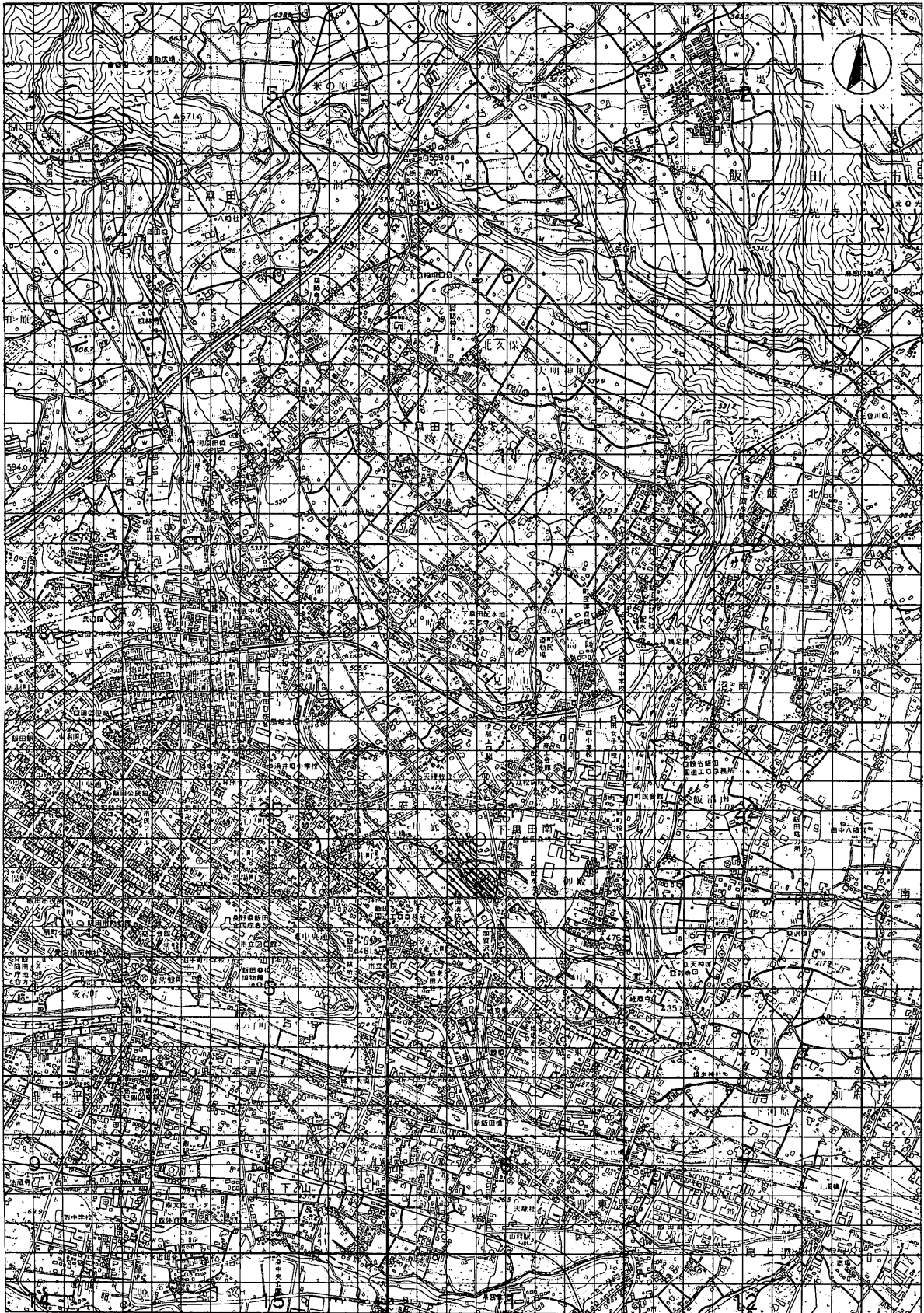
別府中島遺跡は15基の古墳が所在し、4基が現在でも残存する。本遺跡は中央の一部で、昭和61年度道路改良工事に先立ち発掘調査されているものの、当該地周辺では試掘・発掘調査とも実施されておらず、野底川沿いの低位段丘上の歴史の一端が明らかになりつつある。



挿図1 調査遺跡位置図



挿図2 調査位置および周辺遺跡地図



0 1 km

挿図3 基準メッシュ図区画調査位置

第三章 調査結果

1. 調査の方法と概要

用地内の建物建設部分をを対象として、2箇所の調査区を設定した。

測量用の基準杭設置は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、(株)ジャステックに委託して実施した。なお、基準メッシュ図の区画については『三尋石遺跡 三尋石(Ⅱ)遺跡』(飯田市教育委員会1996)に詳しく記述されているので、そちらを参照していただきたい。本調査地の区画は挿図3にて示すとおりLC75 21-35・21-43・21-44である。

2. 遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

1) 縄文時代

①SB08

遺構 AB37を中心として検出し、北側が用地外で全体の約半分程を調査した。調査した北側の一部は、既存建物の基礎により深く破壊されている。規模は約5.7mの円形で、主軸方向は不明である。壁高は108cmを測り、中段でやや緩やかになる立ち上がりをして二段になる。床面はほぼ平坦で、全面が軟弱で貼床等は確認されない。柱穴はなく、床面に焼土等も確認されない。埋土には礫が混入し、一部で炭が確認される。

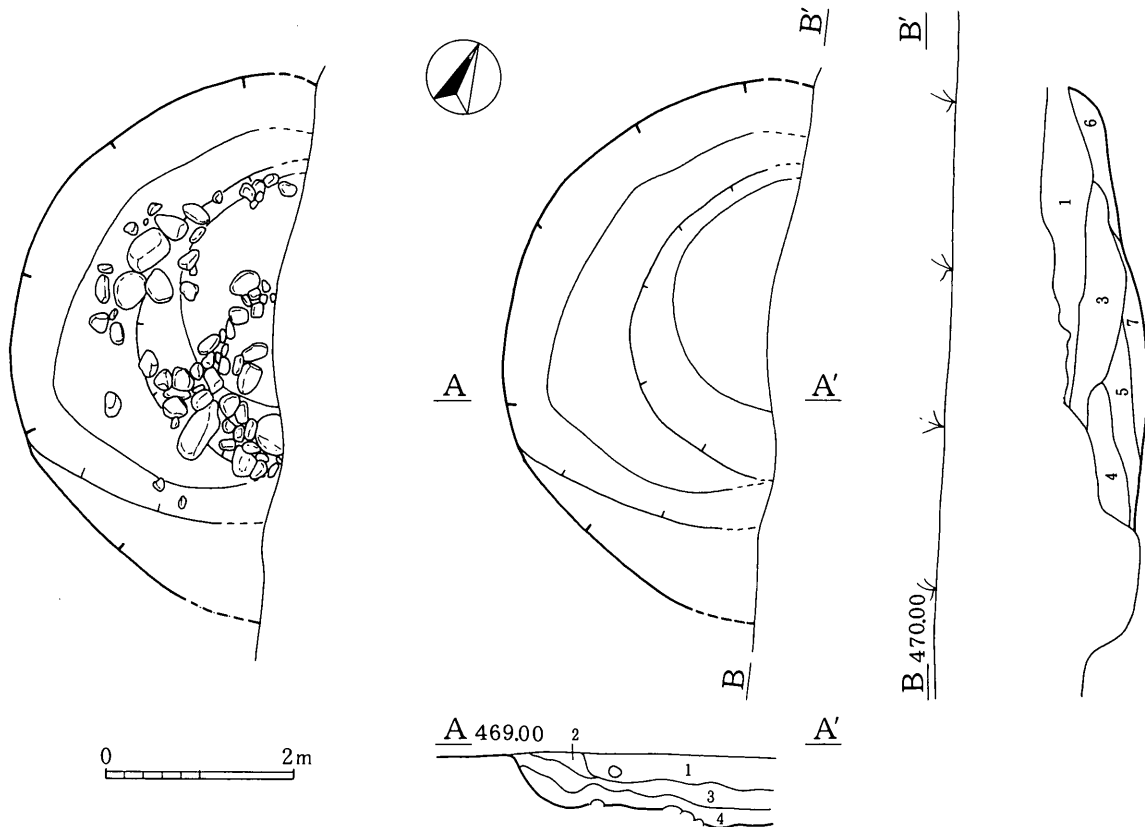
遺物 縄文時代前期後葉土器片が多く出土し、接合する個体の数も多い。石器は打製石斧2点・横刃型石器1と、ごく僅かである。出土遺物より、縄文時代前期後葉に比定される。

2) 弥生時代

①SB05

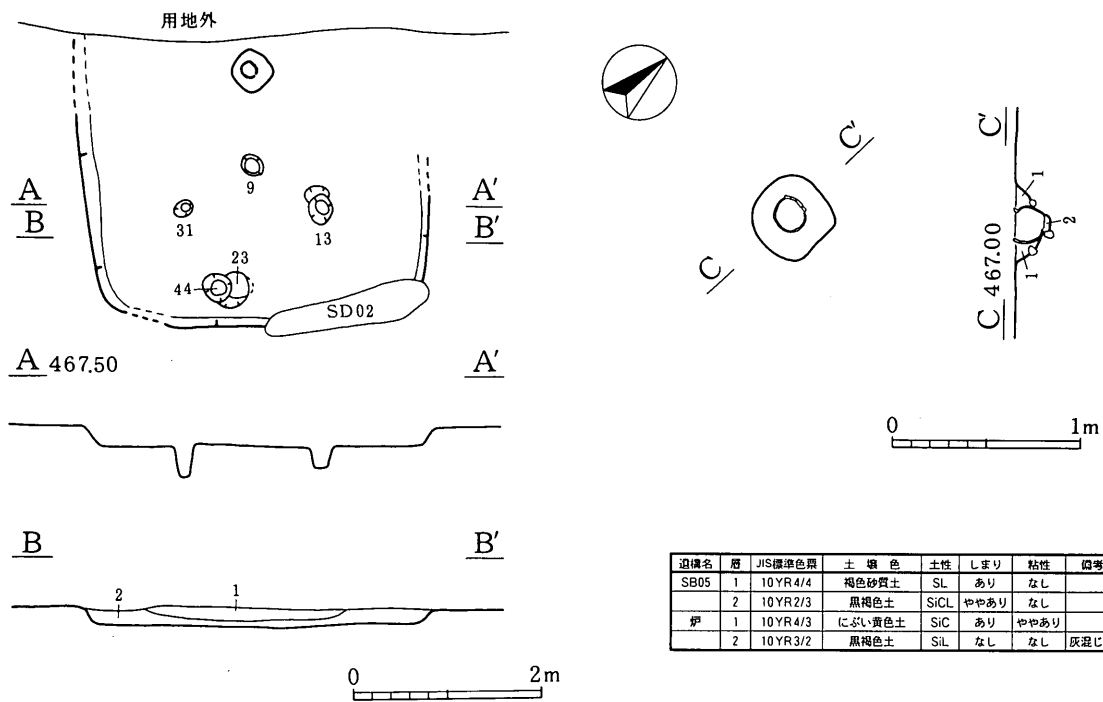
遺構 BO06を中心として検出し、北西側が調査区外となり約四分の三程を調査した。調査した北西側は、既存建物の基礎工事等により破壊され、壁は存在していない。また東側の一部は、SD02に切られる。主軸はN45°Wを示す。壁高は14~16cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は平坦で、たたき状に堅い。主柱穴はP1・P2で、主柱穴の周りには他の床面よりわずかに高くなっていた。炉址は、中央より北西側に位置する土器埋設炉で、床面を79×78cmの不整形円形に掘り、甕の胴部を埋める。甕の周囲には焼土はないが、底部で細かい炭が混じる。

遺物 弥生時代後期の甕の他、高坏・台付甕の脚部が出土する。第3図1は土器埋設炉として使用されていたものである。石器は、打製石斧・磨製石斧・快入打製石庖丁で数少ない。その他縄文時代前期後葉の土器が数点出土するが、いずれも混入したものであろう。これらより、弥生時代後期終末に比定される。



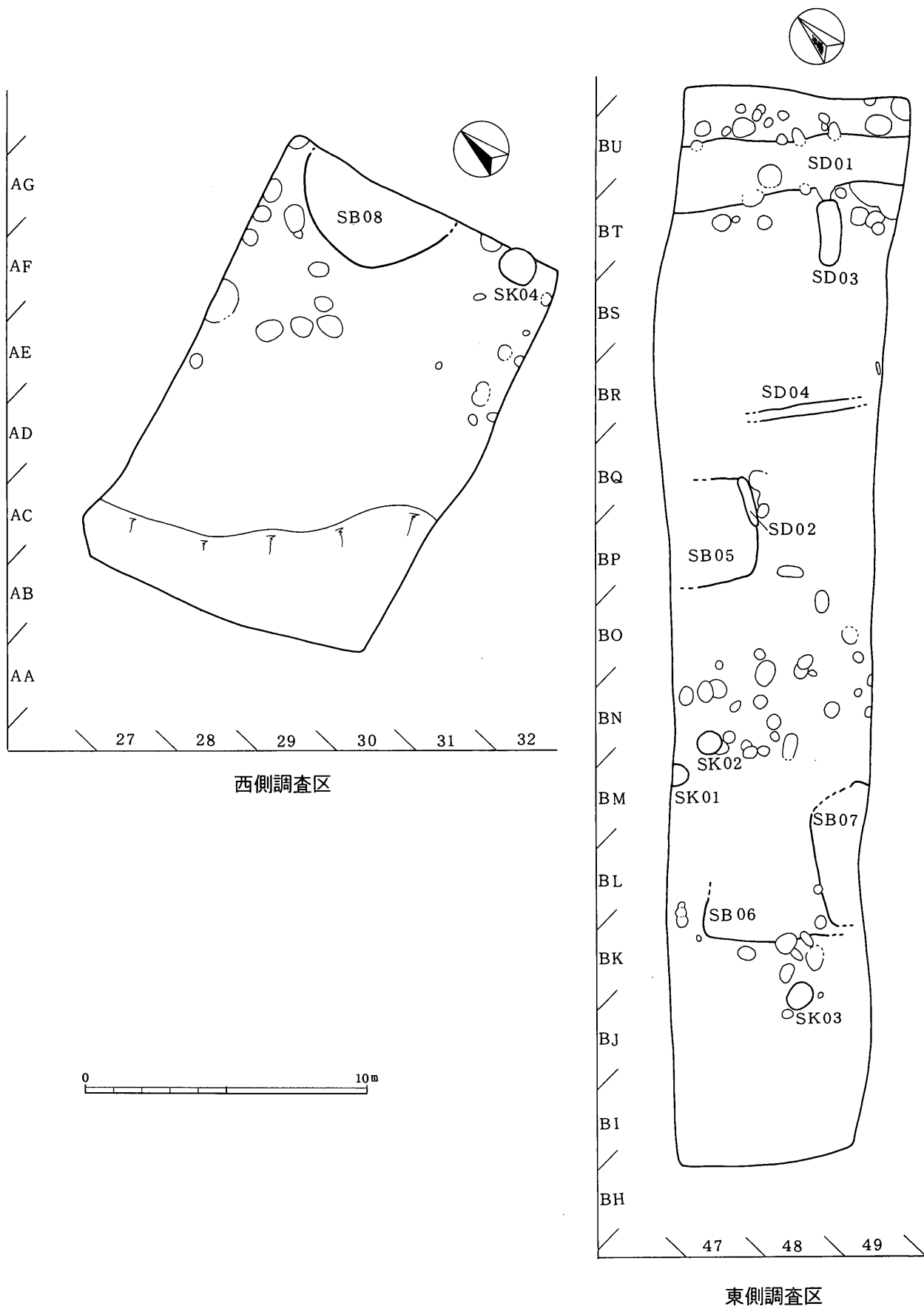
遺構名	層	JIS標準色票	土 壌 色	土性	しまり	粘性	備考
SB08	1	10 YR 4/3	にぶい黄色土	SCL	あり	あり	
	2	10 YR 4/2	灰黄褐色土	SCL	あり	なし	
	3	10 YR 4/6	褐色土	SCL	あり	なし	
	4	10 YR 3/4	暗褐色土	S	あり	なし	灰混じり
	5	10 YR 3/4	暗褐色土	SCL	あり	なし	
	6	10 YR 2/3	黒褐色土	SiCL	あり	なし	
	7	10 YR 3/4	暗褐色土	SiCL	あり	なし	

挿図 4 SB08



遺構名	層	JIS標準色票	土 壌 色	土性	しまり	粘性	備考
SB05	1	10 YR 4/4	褐色砂質土	SL	あり	なし	
	2	10 YR 2/3	黒褐色土	SiCL	ややあり	なし	
炉	1	10 YR 4/3	にぶい黄色土	SiC	あり	ややあり	
	2	10 YR 3/2	黒褐色土	SiL	なし	なし	灰混じり

挿図 5 SB05



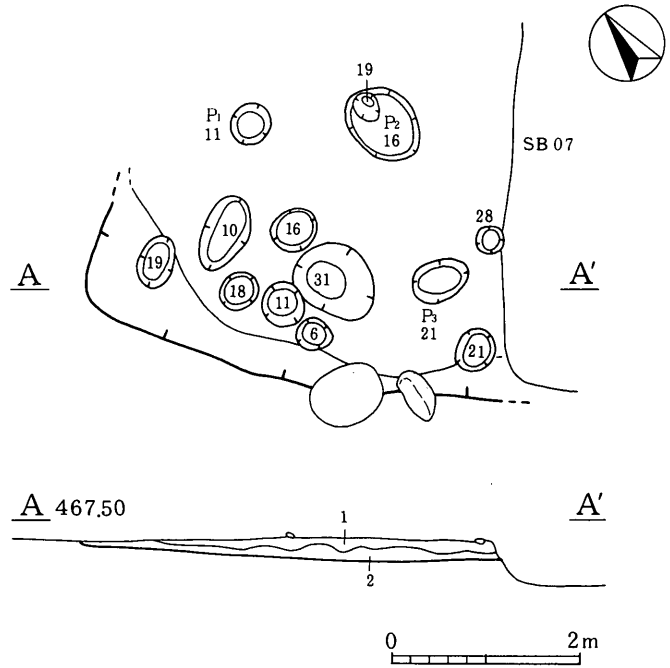
挿図6 遺構全体図

3) 時期不明

①SB06

遺構 BJ02を中心として検出するが、北東側がほとんど削平され、南西側の壁面と穴が残存するのみである。規模・主軸は不明である。壁高は15~22cmで緩やかで、床面との境は明確ではない。床面は緩やかに中心に向かって傾斜しており、全体が軟弱で堅い部分はない。支柱穴は不明であり、炉址・焼土等も確認されない。

遺物 縄文時代前期後葉土器が10点程度出土するほか、縄文時代後期と考えられる土器片が2点ある。石器は出土していない。



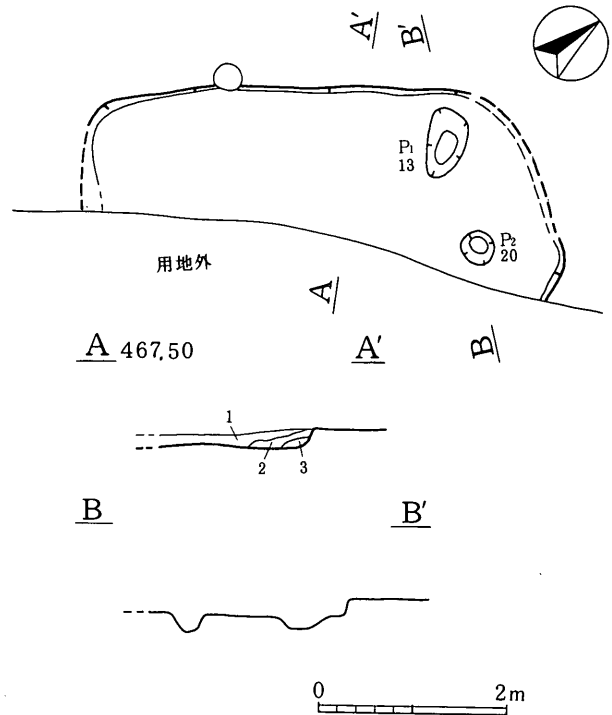
遺構名	層	JIS標準色票	土 壤 色	土性	しまり	粘性
SB06	1	7.5YR4/4	褐色土	SIL	あり	ややあり
	2	10YR5/5	黄褐色土	SIL	あり	ややあり

挿図7 SB06

②SB07

遺構 BI04を中心として検出し、南東側が調査区外となる。既存建物の基礎により、壁面が部分的に壊されており、規模・主軸は不明である。壁高は13~20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はたたき状に堅い。支柱穴・炉址は不明である。

遺物 縄文時代前期後葉の土器が出土遺物の大半を占めており、弥生時代後期後半の土器が含まれる。



遺構名	層	JIS標準色票	土 壤 色	土性	しまり	粘性
SB07	1	10YR4/4	褐色土	SIL	あり	ややあり
	2	10YR3/4	暗褐色土	SICL	あり	ややあり
	3	10YR4/3	にがい黄褐色土	SIL	あり	なし

挿図8 SB07

(2) その他の遺構

①SD01

遺構 BT10～BQ13にかけて検出し、両端が用地外に続いている。調査延長は約8.2mで、幅2.4～1.6m・深さ約50cm前後で、長軸方向はNを示す。埋土の下層には、花崗岩の礫が混入する。

底面は多少の凹凸があり、地山の礫が見られる。

遺物 弥生時代後期後半の土器片が出土するほか、縄文時代前期後葉の土器片・打製石斧が見られる。第4図25は東海系の土器である。出土遺物等より、弥生時代後期後半に比定される。

②SD02

遺構 BO07で直線的に検出し、SB05を切る。長さ1.8m・幅29～42cmで、深さは約20cm前後である。長軸方向はN26° Eを示す。底面は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる。埋土に礫等は含まない。

遺物 なし

③SD03

遺構 BQ11付近で、ほぼ直線的に検出する。長さ2.3m・幅65～74cmで、深さは約30cm前後である。長軸方向はN44° Eを示す。底面はほぼ平坦で、緩やかに立ち上がる。

遺物 なし

④SD04

遺構 BO～BP09で直線的に検出され、両側は既存建物の基礎工事で壊される。調査延長は約3.6mで、幅32～38cm・深さ5～10cm前後で、長軸方向はN54° Wを示す。底面は多少の凹凸があり、断面形は逆台形をなす。

遺物 なし

⑤SK01

遺構 BL02・03で検出し、北西側が調査区外へと続き、全体の約1/2程を調査した。規模・長軸方向は不明であるが楕円形を呈し、深さ約22cmを測る。底面はほぼ平坦で、緩やかな壁面をなす。

遺物 なし

⑥SK02

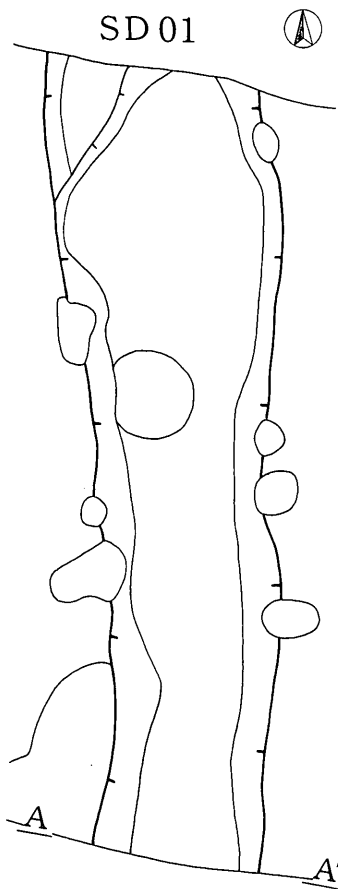
遺構 AK・AL03で検出し、東側をピットに切られ全体を調査した。87×86cmの楕円形を呈し、深さ16cmを測る。長軸方向はN57° Eを示す。底面はほぼ平坦で、緩やかな壁面をなす。

遺物 なし

⑦SK03

遺構 BH01で検出し、全体を調査した。107×88cmの不整形円形を呈し、深さ41cmを測る。長軸方向はN82° Eを示す。底面は平坦で、断面形は逆台形をなす。

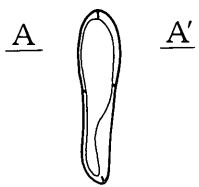
遺物 縄文時代前期後葉の土器片が出土するが、該期の遺構であるかどうかは不明である。



A 467.20 A'



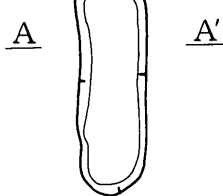
SD 02



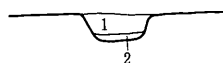
A 467.40 A'



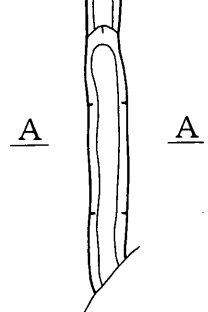
SD 03



A 467.10 A'



SD 04



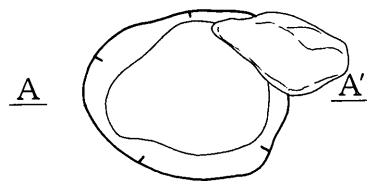
A' 467.40 A'



0 2m

遺構名	層	JIS標準色票	土 壌 色	土性	しまり	粘性	備考
SD01	1	7.5YR2/3	黒褐色土	SIC	あり	あり	
	2	10YR3/3	暗褐色土	SL	ややあり	なし	砂多い
	3	10YR2/2	黒褐色土	SIL	あり	なし	
	4	10YR4/3	にぶい黄色土	S	なし	なし	砂多い
SD03	1	7.5YR2/2	黒褐色土	SIC	あり	ややあり	
	2	10YR4/3	にぶい黄色土	SL	なし	なし	

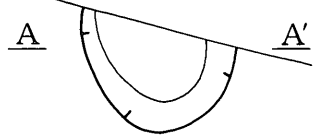
SK 03



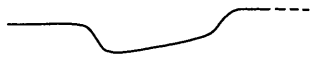
A 467.50 A'



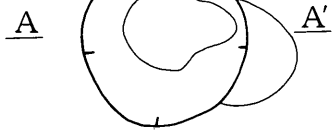
SK 01



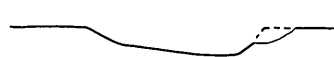
A 467.20 A'



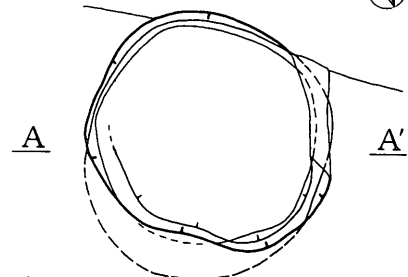
SK 02



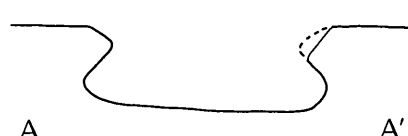
A 467.20 A'



SK 04

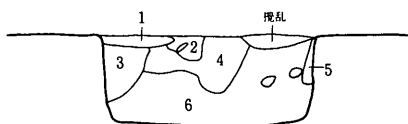


A 467.00 A'



A A'

遺構名	層	JIS標準色票	土 壌 色	土性	しまり	粘性
SK04	1	10YR3/4	暗褐色土	SIL	あり	なし
	2	10YR2/2	黒褐色土	L	なし	なし
	3	7.5YR2/2	黒褐色土	SIL	なし	なし
	4	10YR5/6	明褐色土	SIL	なし	なし
	5	10YR4/6	褐色土	SIL	なし	なし
	6	7.5YR2/1	黒色土	SIL	なし	ややあり



0 1m

挿図9 SD・SK

⑧SK04

遺構 BX・BY38で検出し、全体を調査した。検出面では直径約116cm程の円形を呈し、深さ44cmを測る。底面は平坦で、断面形は袋状をなして広がり、その直径は最大で129cmを測る。

遺物 縄文時代前期後葉の土器片が多数出土し、石器は敲打器が1点あるのみである。

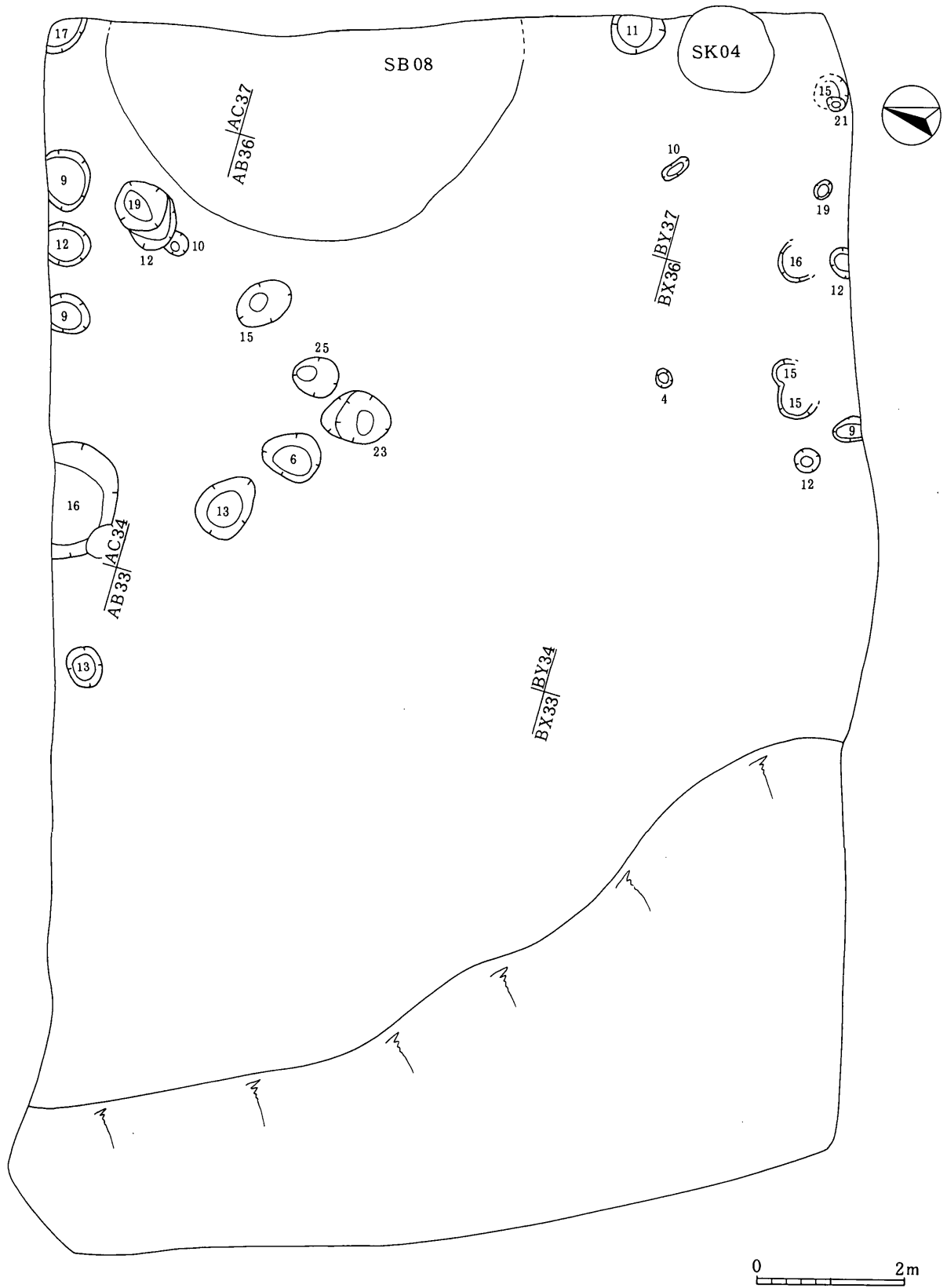
(3) 遺構外出土遺物

縄文時代から弥生時代の遺物が出土しており、特に縄文時代前期の遺物が多い。

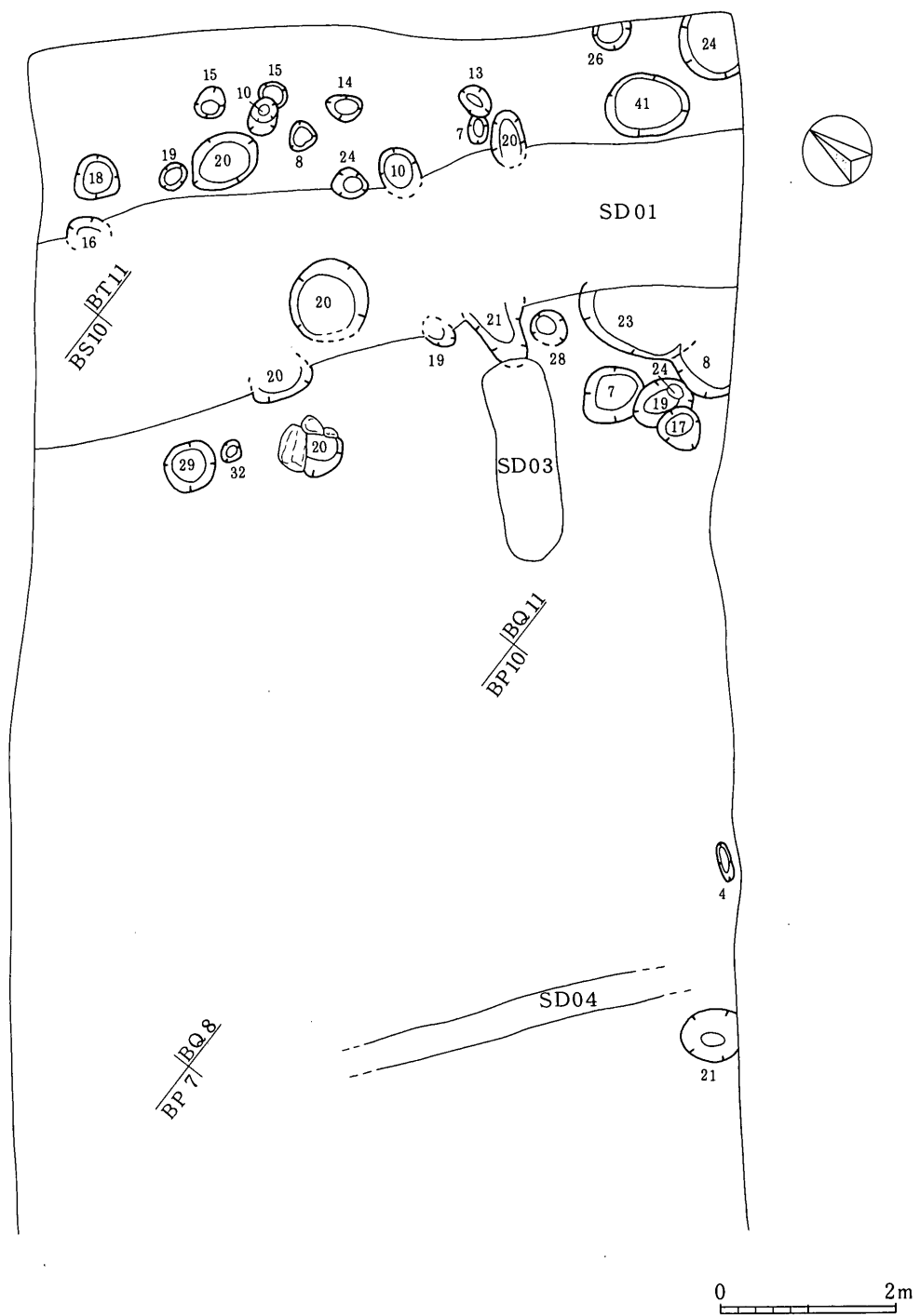
縄文時代の遺物は、そのほとんどが前期後葉の土器片であり、第6図1から第7図20で示したとおりである。その他に石器では打製石斧・石鏃がある。

弥生時代の遺物は、後期後半から終末の甕・壺・台付甕・鉢の破片があり、特に第7図23・27は外来系土器である。石器は、快入打製石庖丁がある。

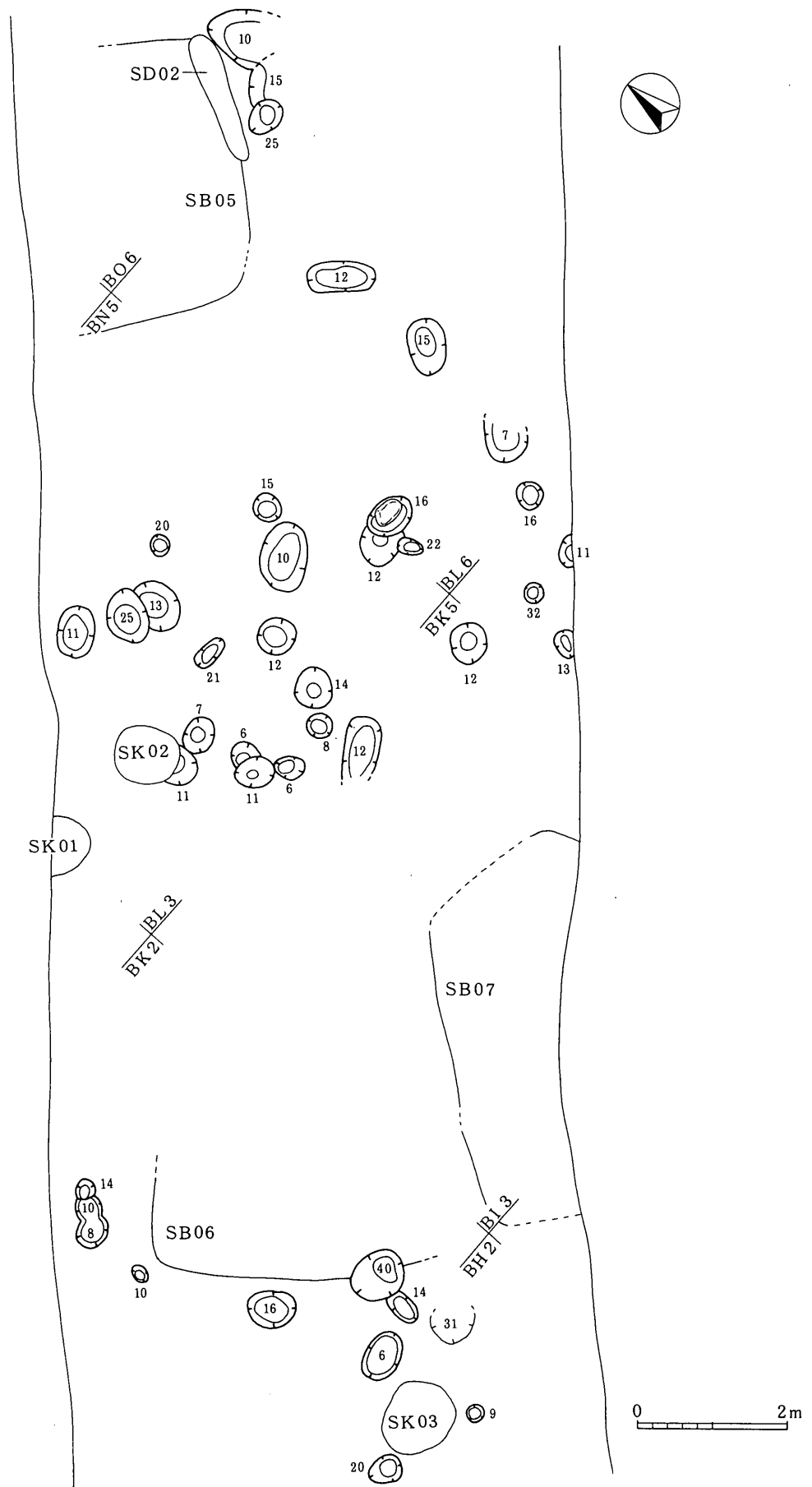
また、試掘調査実施時に条痕文が施された弥生時代前期深鉢の土器片が確認された。しかし、試掘調査実施地点が若干東側の工事計画地外となっていたため、本発掘調査にての遺構・遺物確認はできなかった。



挿図10 西側調査区周辺柱穴平面図



挿図11 東側調査区周辺柱穴平面図 (1)



挿図12 東側調査区周辺柱穴平面図 (2)

第Ⅳ章 まとめ

今次調査で検出された遺構・遺物はすでに述べたとおりである。当初より、詳細分布調査等にて存在が予想された、縄文時代晩期および古墳時代後期の集落等は確認されず、全く新たな調査結果が得られた。ここでは、調査によって得られた成果・問題点などを各時期ごとに記述し、まとめとしたい。

1. 縄文時代

S B08・S K04から、前期後葉の結節浮線文を渦巻状にモチーフ構成する下島式土器と、諸磯C式土器が多数出土しており、調査区全体でこれらの遺物の出土が確認される。しかし、今次調査で該期の遺構は、西側調査区にてのみにとどまり、遺構の広がりを捉えることができなかった。だが、段丘を隔てて北東側に隣接する高松原遺跡2号住居址より、該期の深鉢が出土しており、野底川に沿って広がるこの低位から中位段丘上に、該期集落の広がりが予想できる。その他飯田市内では、同じ上郷地区の黒田大明神原遺跡において、前期後葉から終末の竪穴住居址・大型の建物址・土坑等が出土するほか、座光寺地区の美女遺跡においても、前期終末の竪穴住居址等が確認されている。しかし、伊那谷において下島式土器の断片的な出土例はあるが、発掘調査によるものは殆どなく、今次調査の大きな成果であるといえる。

当初は、市内遺跡詳細分布調査により晩期の土器片が表採され、後・晩期集落の存在が予想された。しかしながら、今次調査での出土遺物は2点の土器片みであり、該期集落は確認できなかった。これらの存在を明らかにしていくことが、今後の課題であろう。

2. 弥生時代

主に、東側調査区で後期後半から終末の遺構・遺物が疎らではあるが見られ、該期集落の一端を見ることができた。特にS B05にて出土した甕は、殿原遺跡72・76号住居址にて出土するものと類似する。その他該期集落は、高松原・恒川・兼田・垣外・田井座遺跡等市内に広く確認されており、そのなかでも特に、前述の高松原遺跡で竪穴住居址が40軒以上出土しており、台地上に拠点集落の広がりが見られる。しかし本遺跡は、地形・遺構等の状況から、拠点集落というよりは周辺集落であった可能性が強い。また現地形で推測する限り、当該地周辺には水田可耕地である湿地が存在せず、この時期の集落の遺跡立地としては、特異であるといえよう。

その他、試掘調査にて前期土器が確認されていることより、弥生文化波及時期の重要な遺跡の一つといえよう。

3. 古墳時代

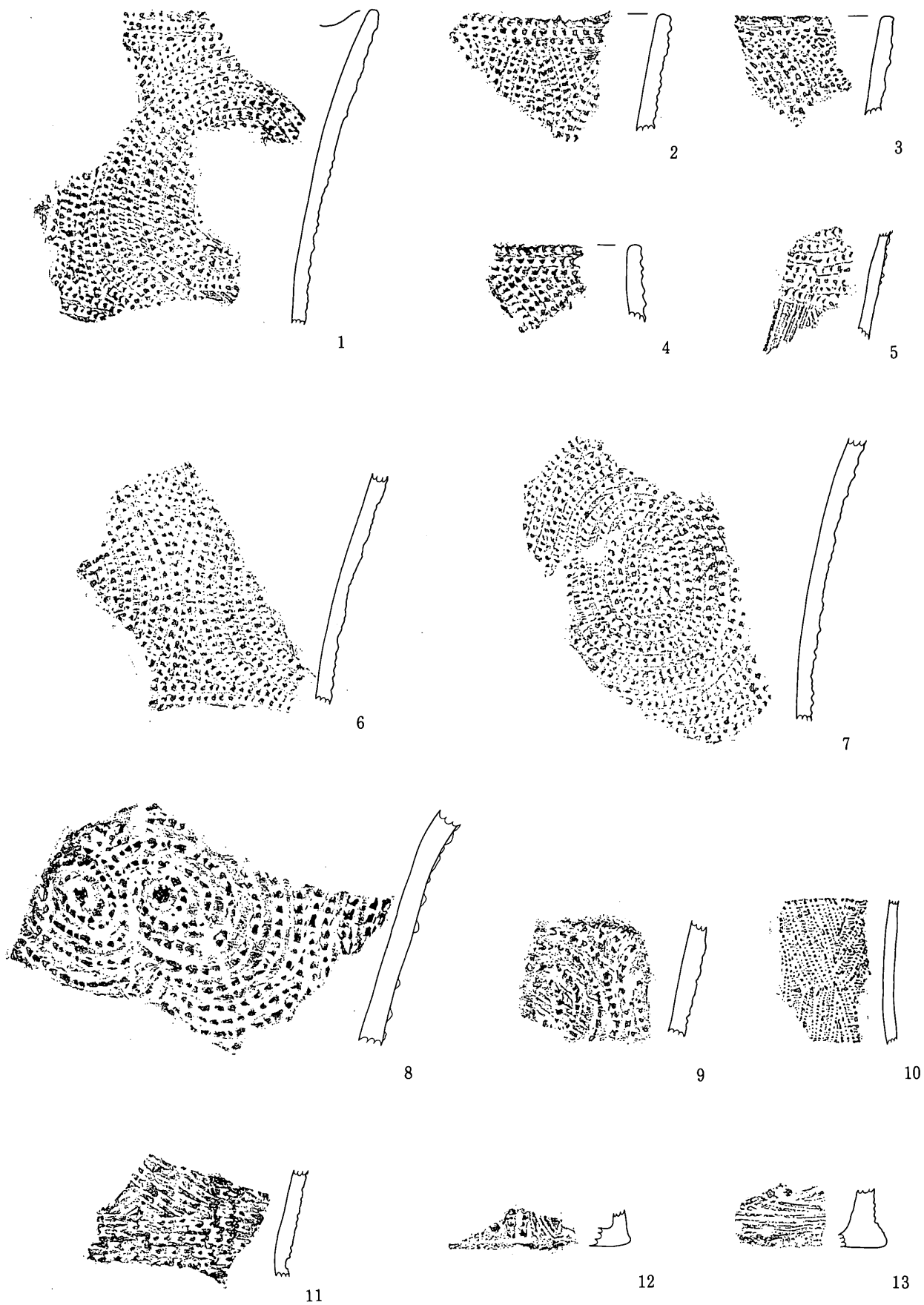
今次調査では、該期の遺構・遺物は確認されていないものの、下伊那史の記述等によれば、調査地周辺にドドメキ1号古墳があったとされている。大正元年以降の開墾等により破壊・削平され、その際に直刀・金環・轡ほか数多くの副葬品が出土している。

今次調査で確認され、弥生時代後期後半に比定したS D01は、調査延長約8.2m・幅2m前後であり、直線的か曲線的になるかの判断はできないが、ドドメキ1号古墳の周溝である可能性を全く否定することはできない。

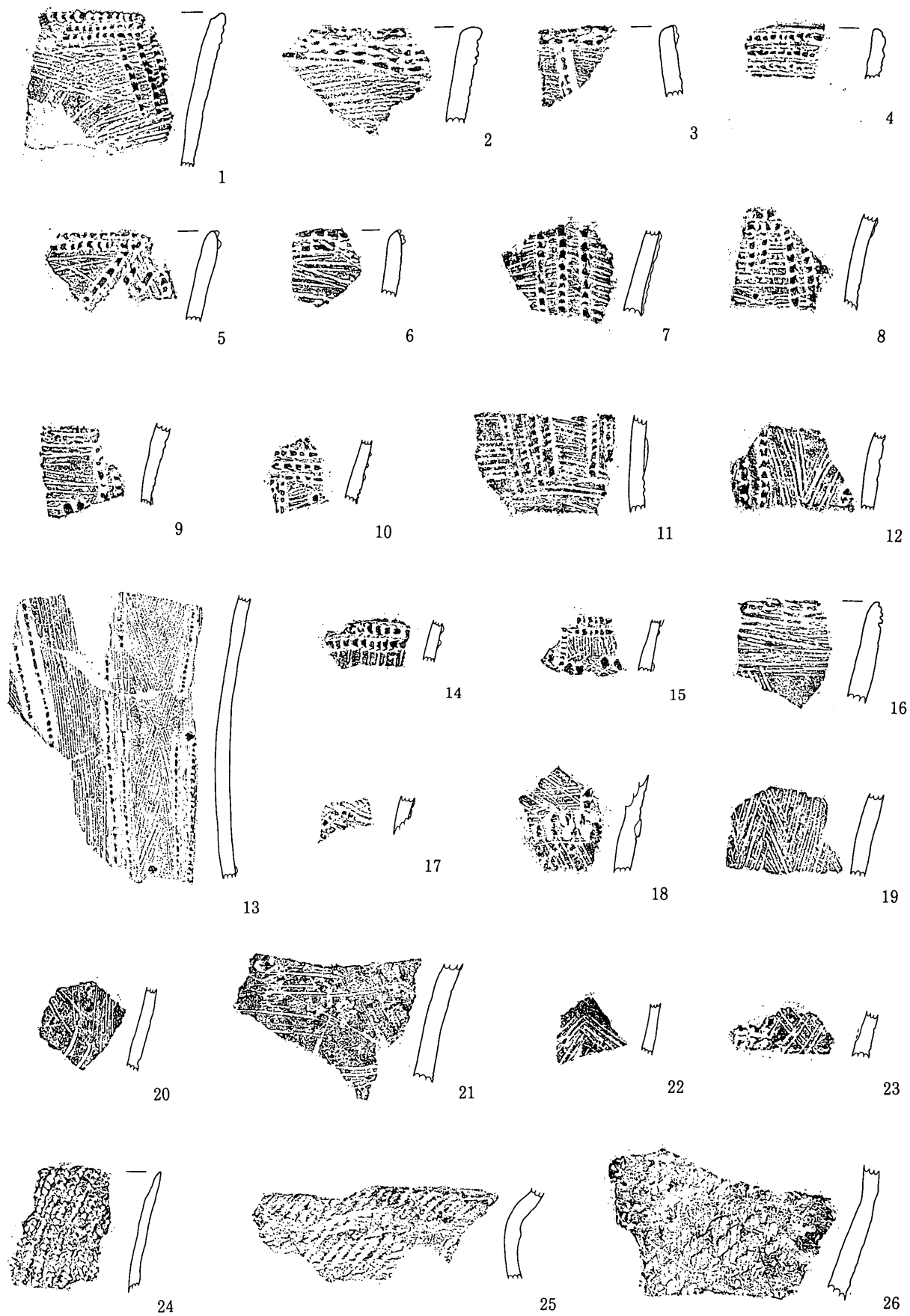
以上気付いた点をあげて、本遺跡の重要性等について記述した。今後、今次調査地点周辺での保護に取り組むとともに、本遺跡の詳細についてより明らかにしていく必要がある。

《参考文献》

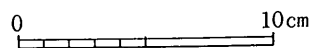
- | | | |
|-------------|------|--------------------------|
| 飯田市教育委員会 | 1986 | 『恒川遺跡群』 |
| 飯田市教育委員会 | 1987 | 『殿原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1988 | 『田井座遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 | 『田井座遺跡・一色遺跡・名古熊下遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 | 『田井座遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1992 | 『田井座遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1995 | 『田井座遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1996 | 『田井座遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1997 | 『黒田大明神原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1998 | 『美女遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1999 | 『三尋石遺跡Ⅲ』 |
| 上郷町教育委員会 | 1984 | 『高松原遺跡Ⅱ』 |
| 上郷町教育委員会 | 1989 | 『中島・矢崎遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1989 | 『ツルサシ・ミカド・増田・垣外遺跡』 |
| 下伊那誌編纂會 | 1955 | 『下伊那史』 第二卷 |
| 下伊那誌編纂會 | 1955 | 『下伊那史』 第三卷 |
| 下伊那誌編纂會 | 1991 | 『下伊那史』 第一卷 |
| 縄文セミナーの会 | 1993 | 『前期終末の諸様相』 |
| 長野県考古学会弥生部会 | 1999 | 『長野県の弥生土器編年』 |
| 長野県史刊行会 | 1988 | 『長野県史 考古資料編 全一卷（四）遺構・遺物』 |

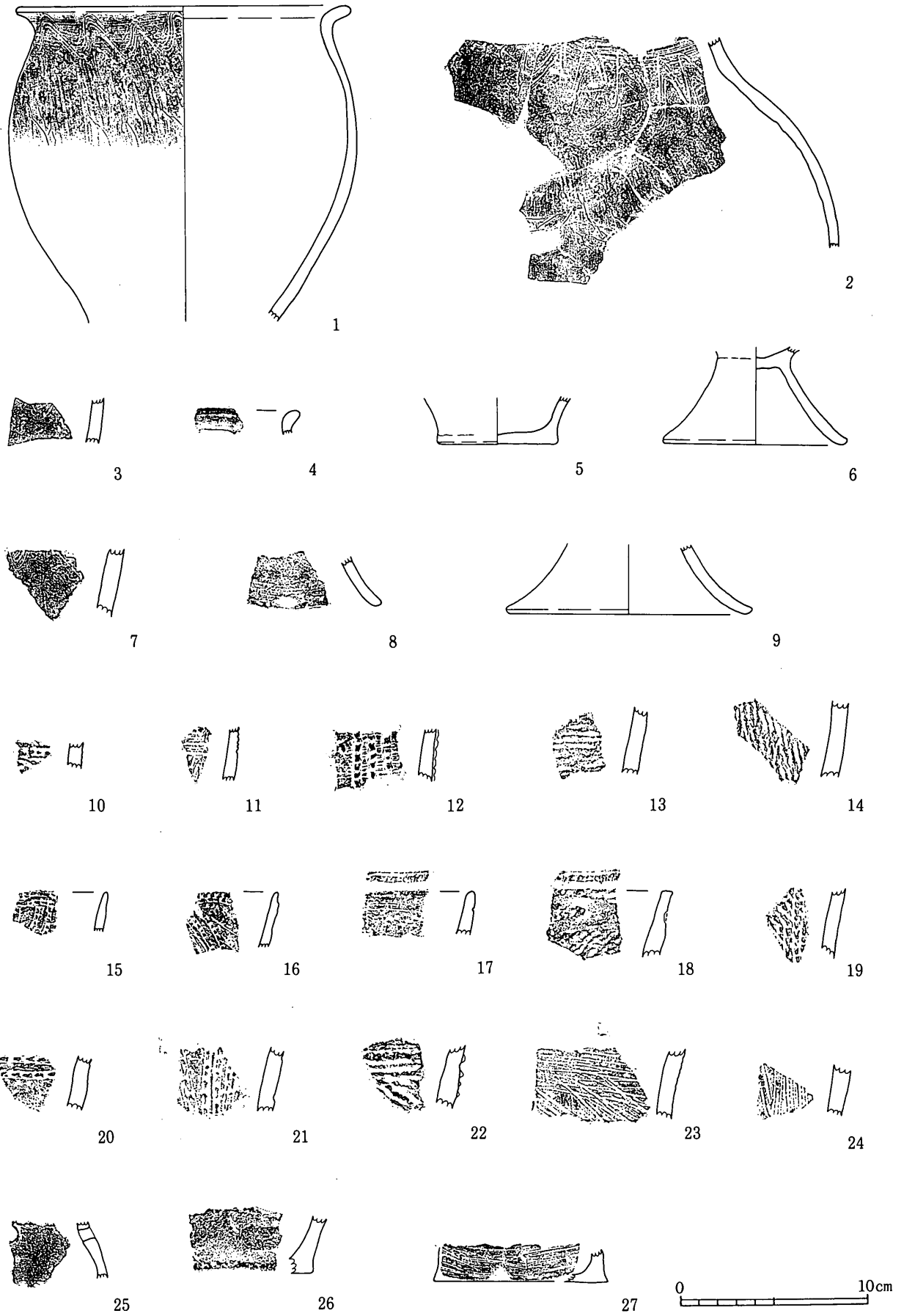


第1图 SB08

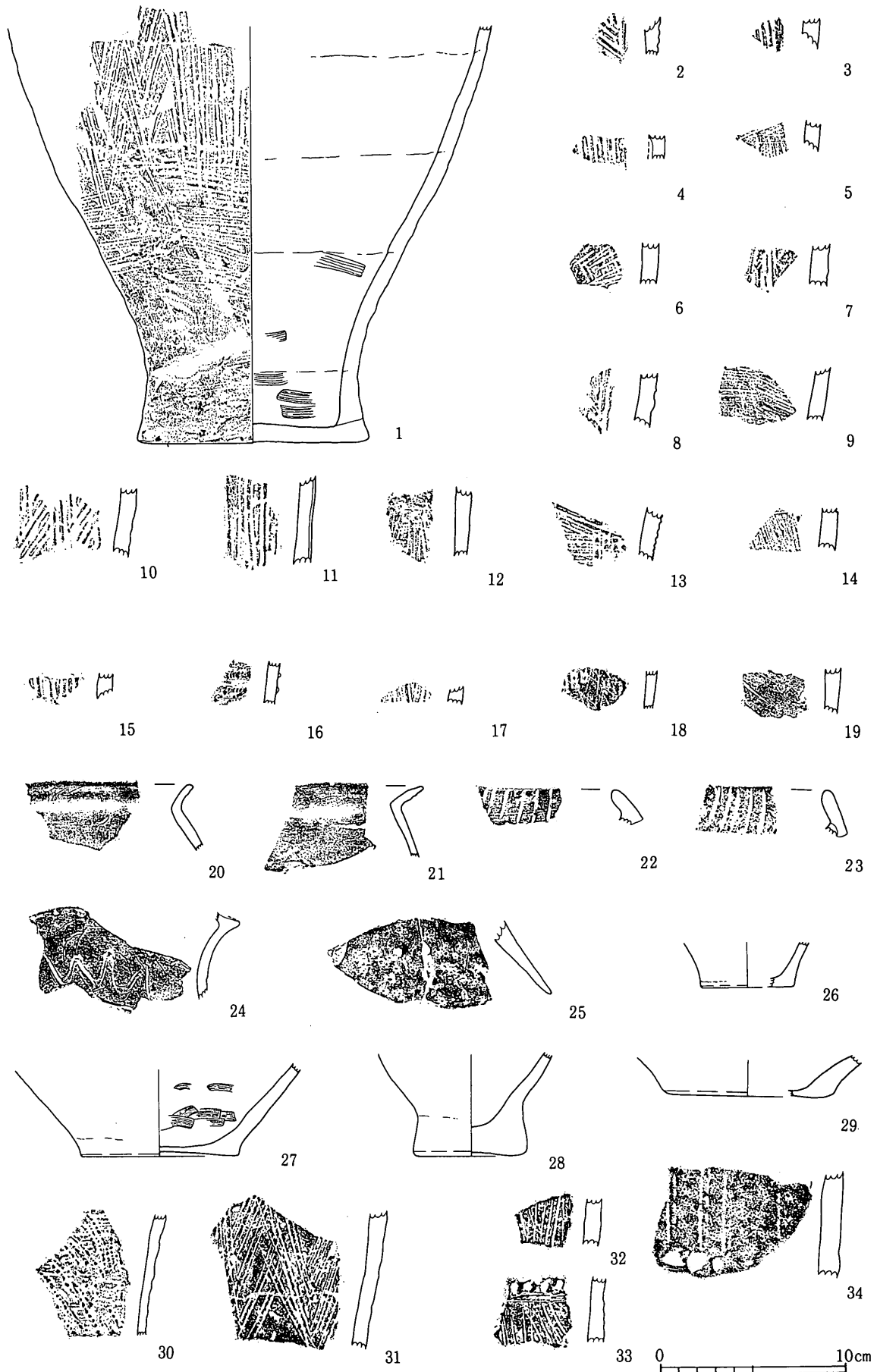


第2图 SB08

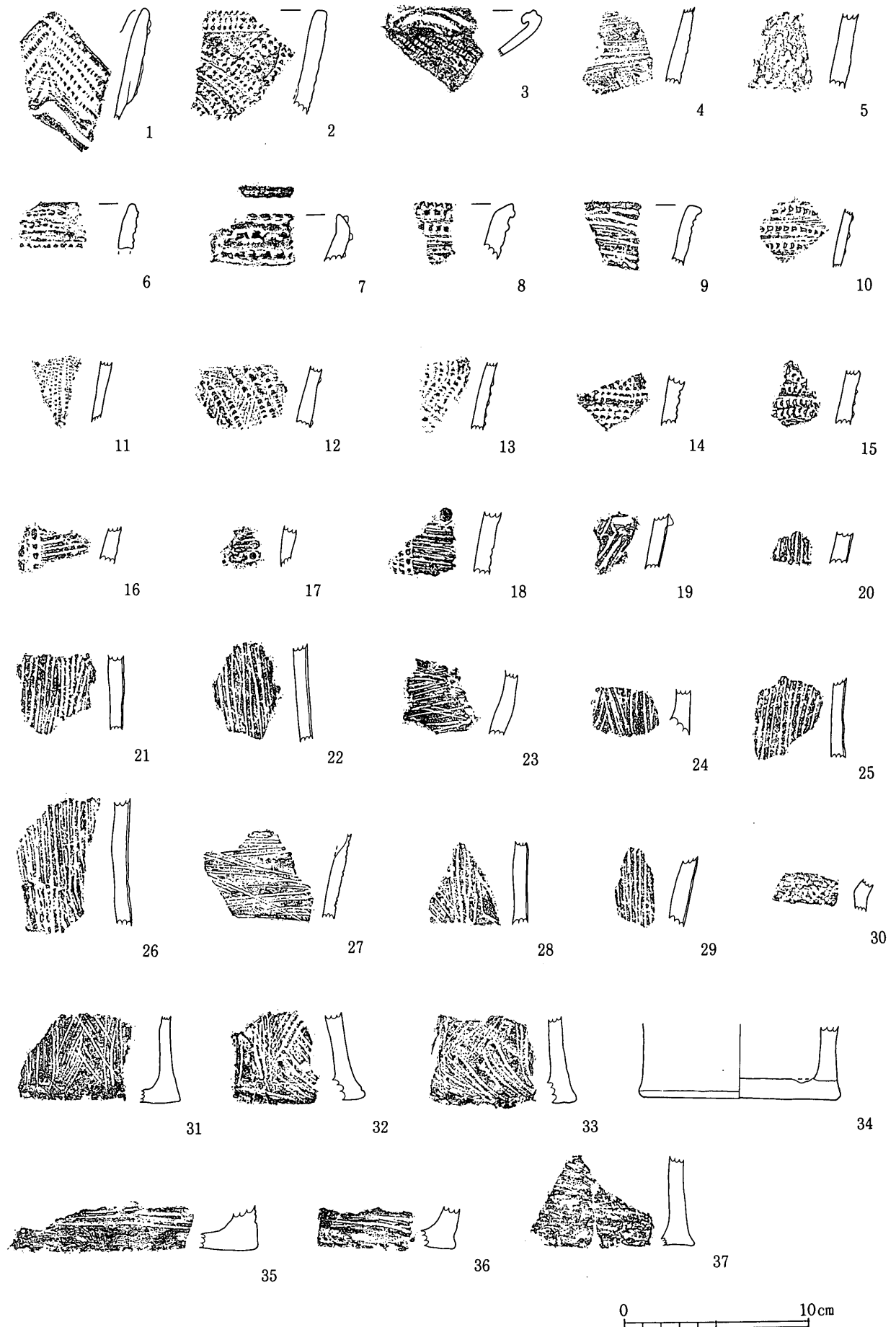




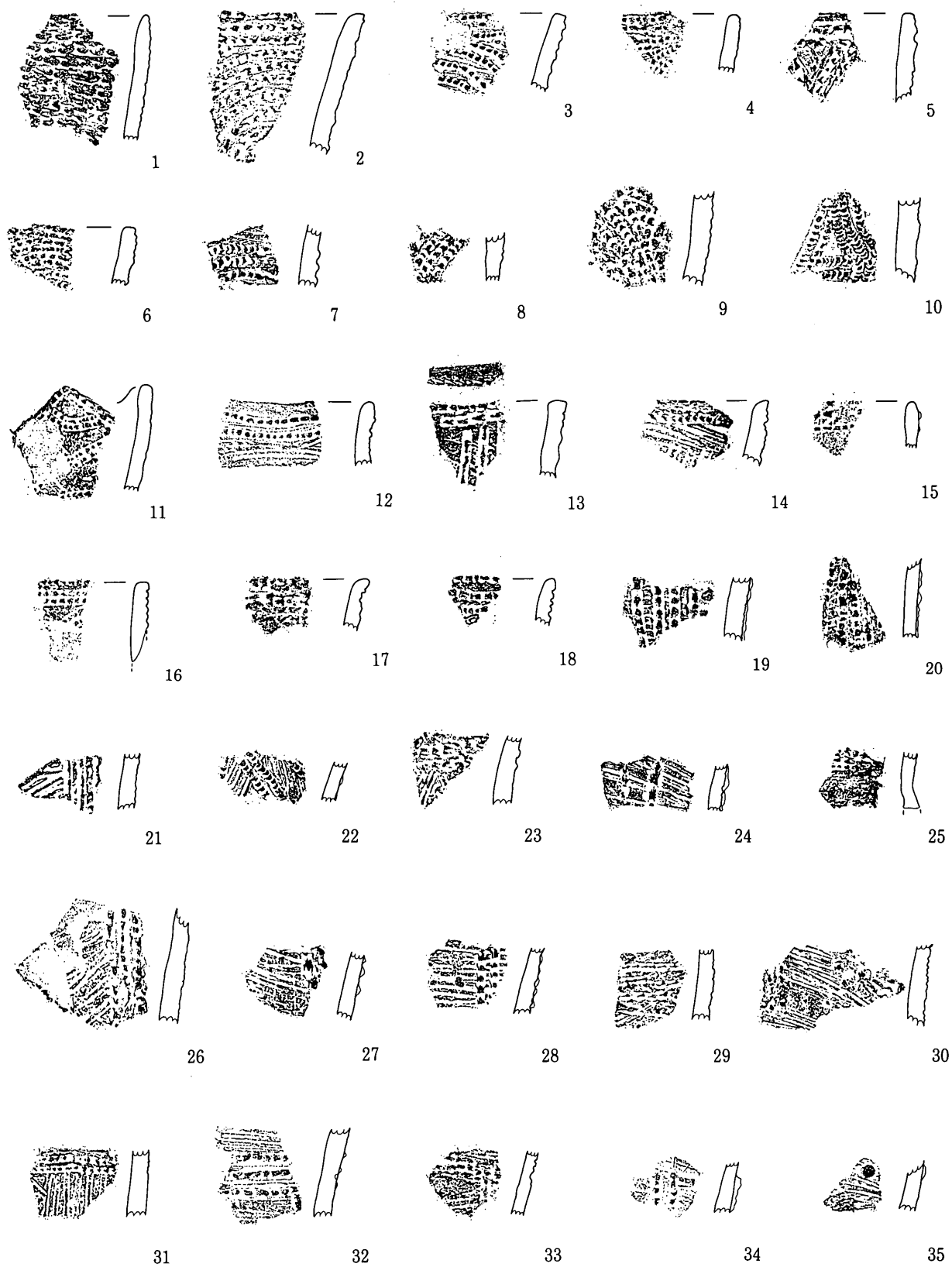
第3図 SB05 SB06 (1~14 SB05・15~27 SB06)



第4图 SB07 SD01 (1~23 SB07 · 24~34 SD01)

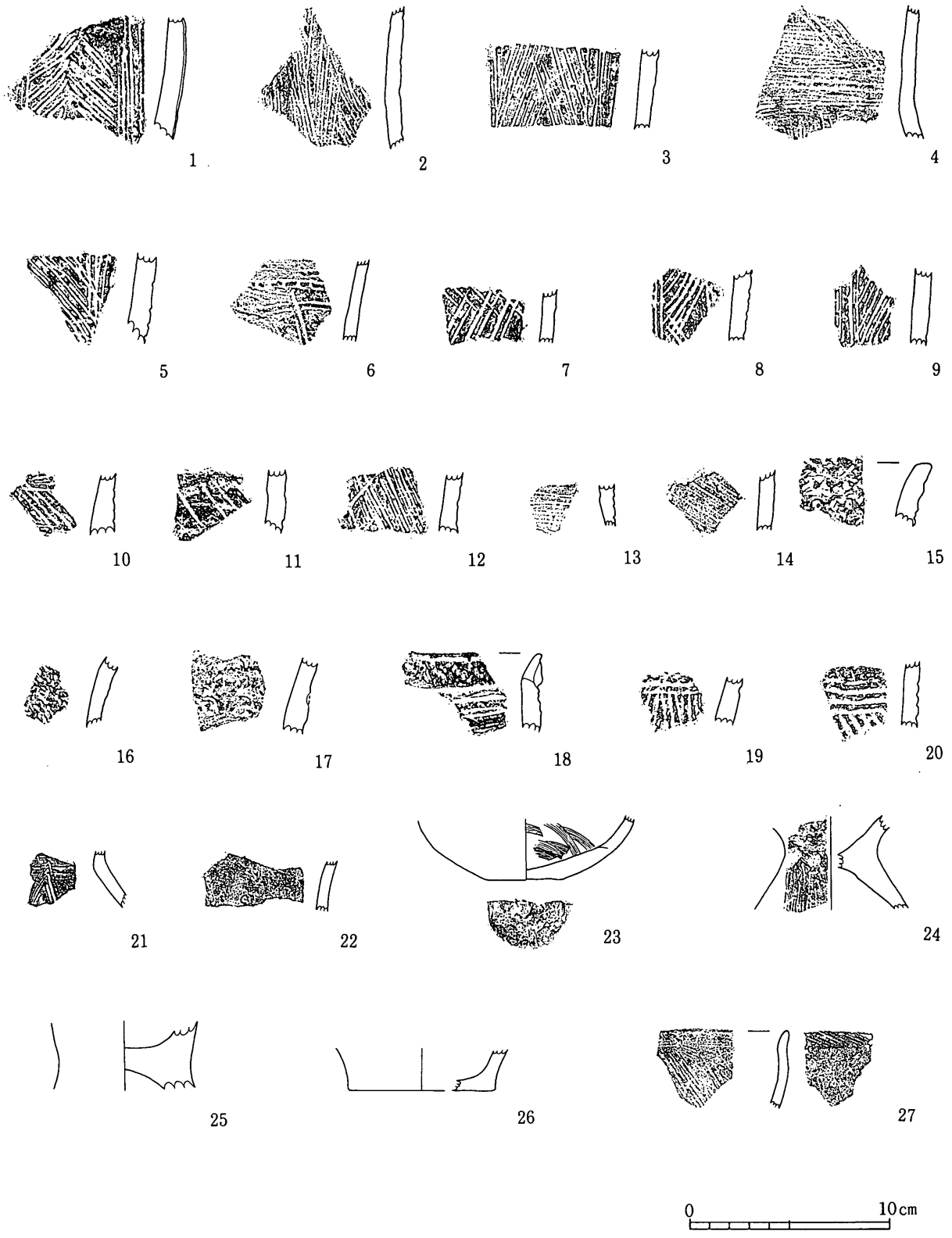


第5图 SK03 SK04 (1~5 SK03·6~37 SK04)



0 10cm

第6図 遺構外出土遺物(1)



第7図 遺構外出土遺物(2)



調査区全景



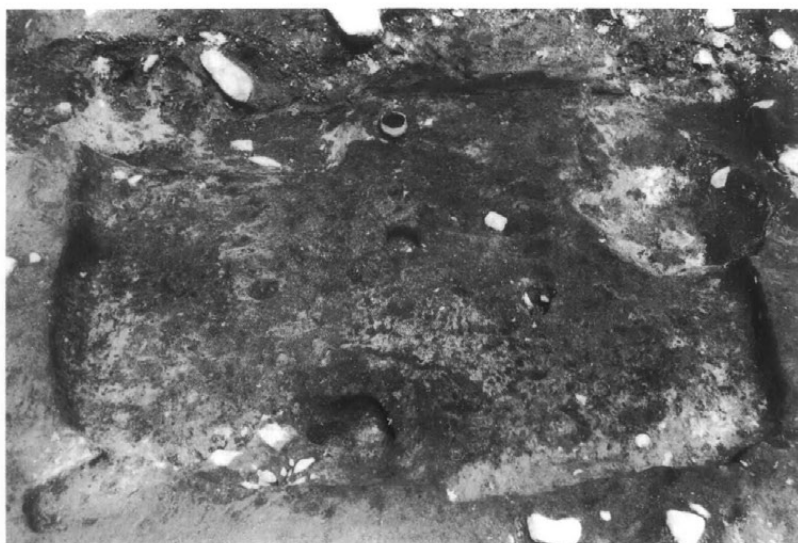
東側調査区



西側調査区



SB08



SB05



同 炉



SD01



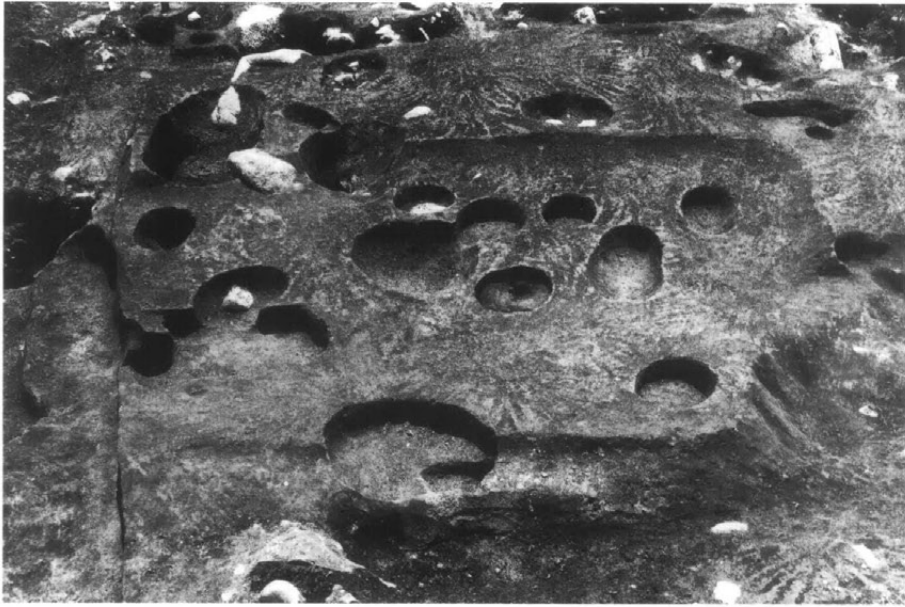
SD02



SD03



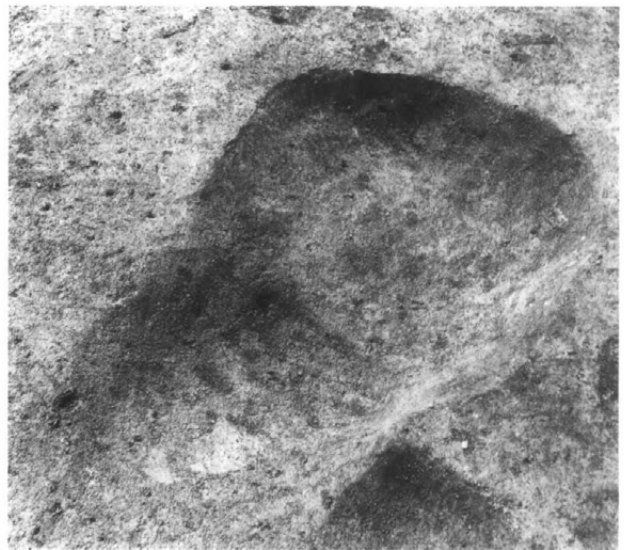
SD04



SB06



SK01



SK02



SK03



SK04

重機作業風景



調査風景

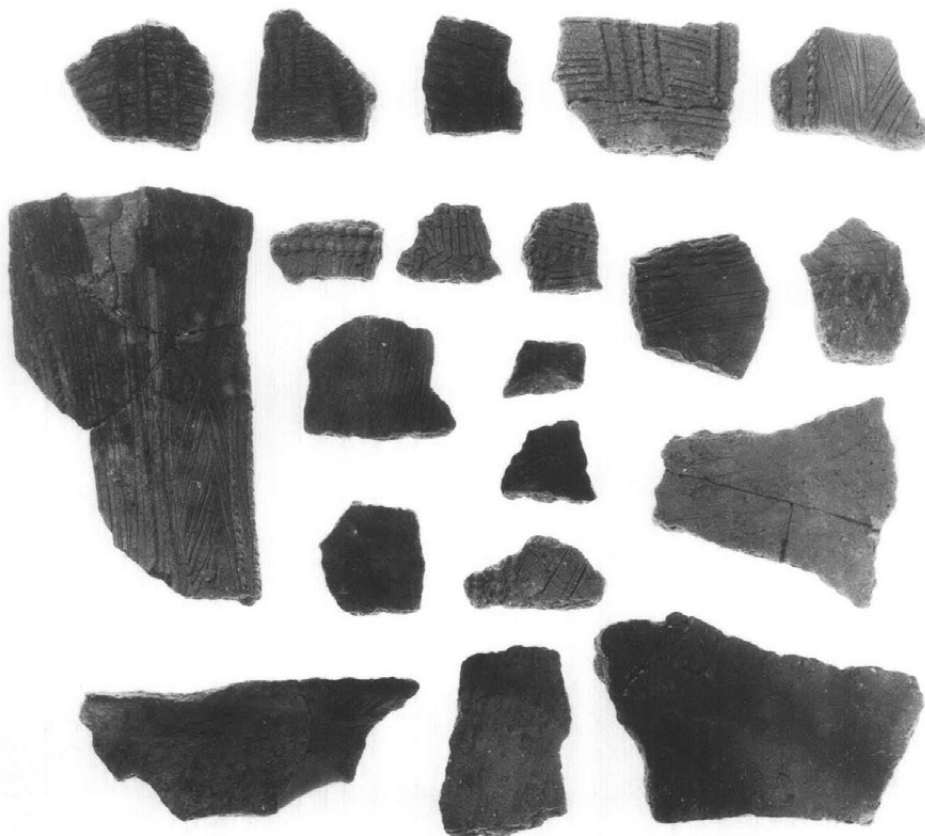


調査風景

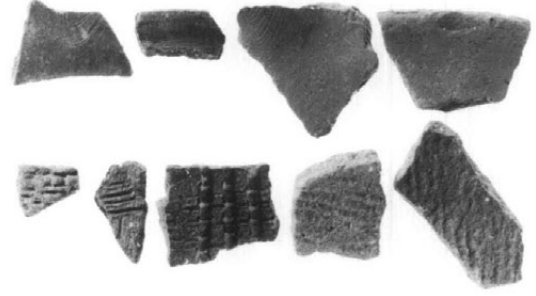




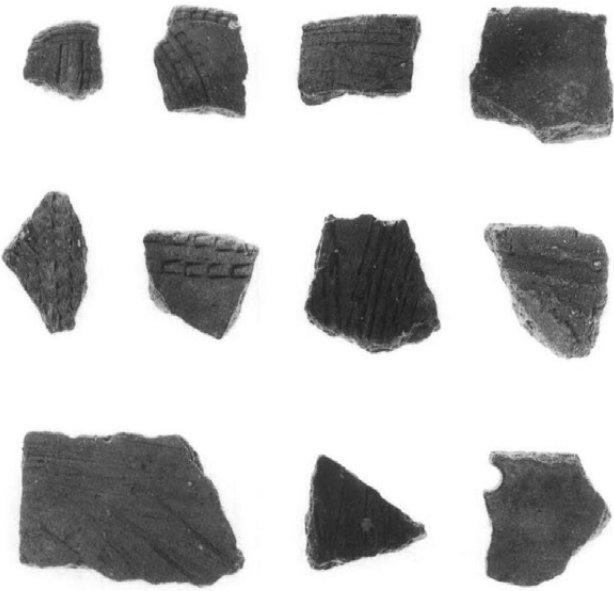
SB08



SB08



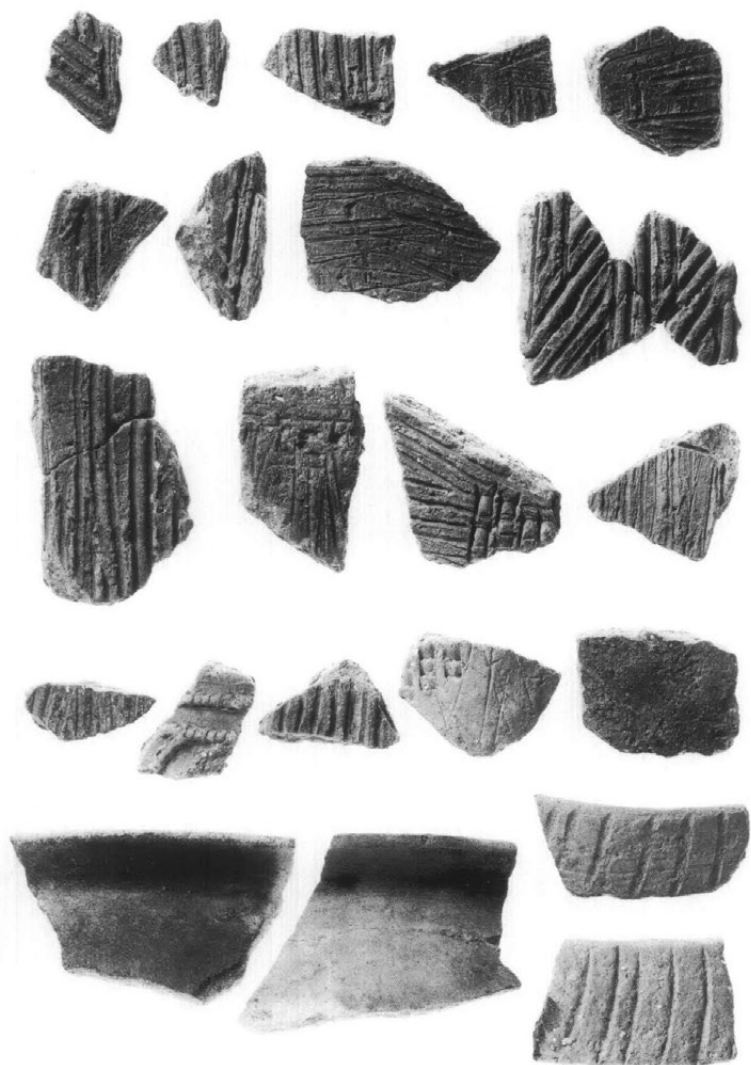
SB05



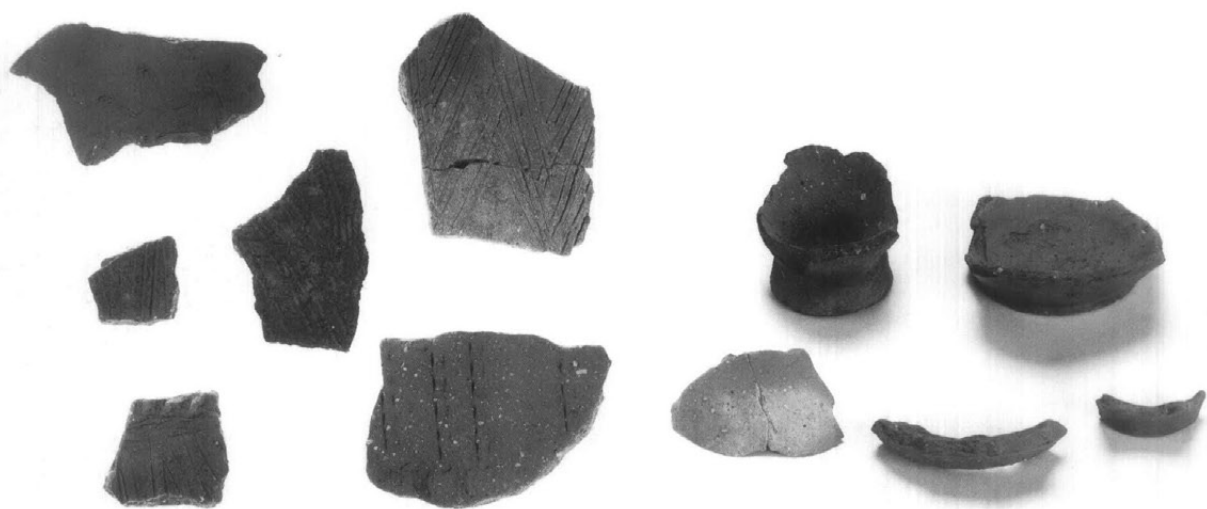
SB06



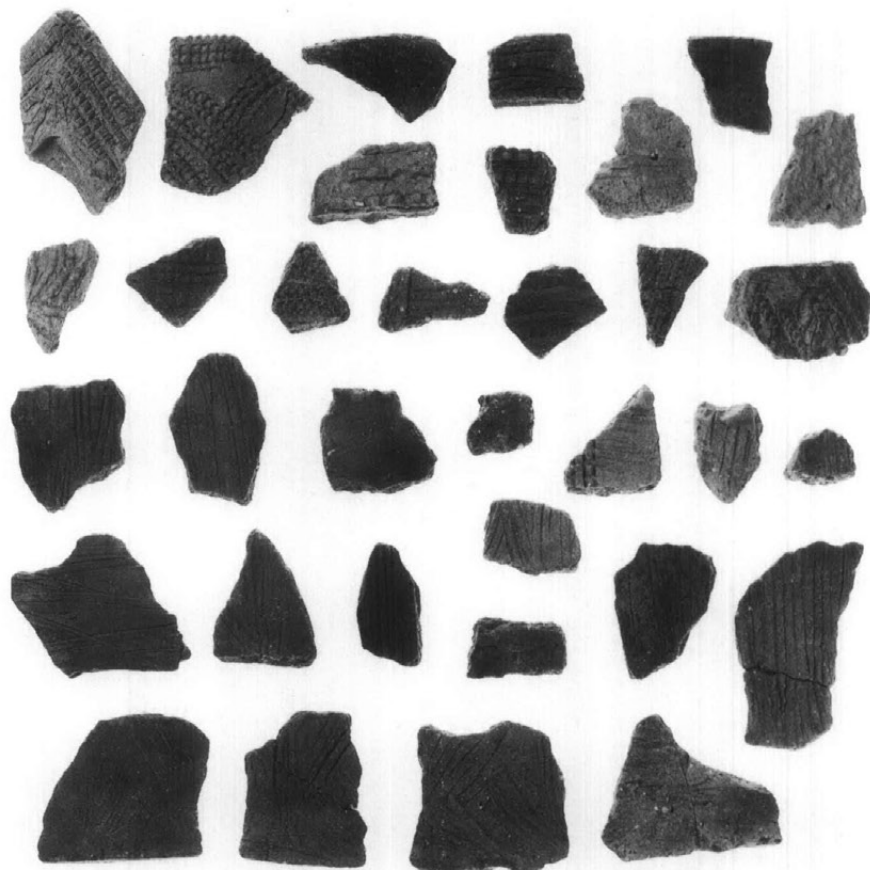
SB07



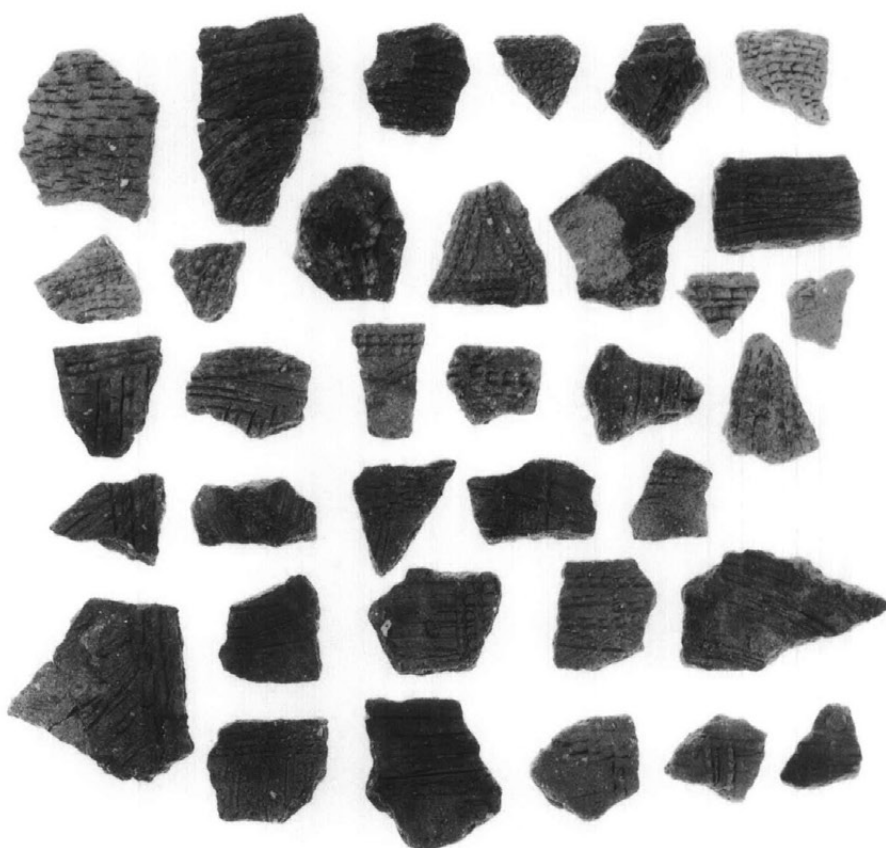
SB07



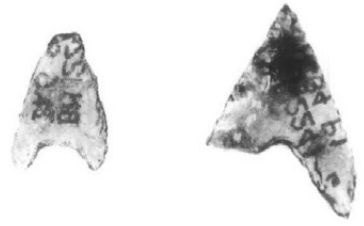
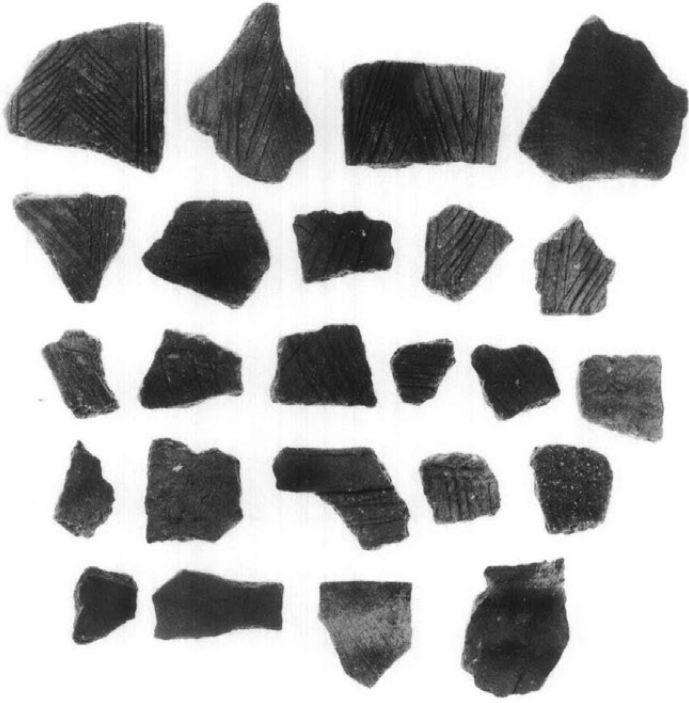
SD01



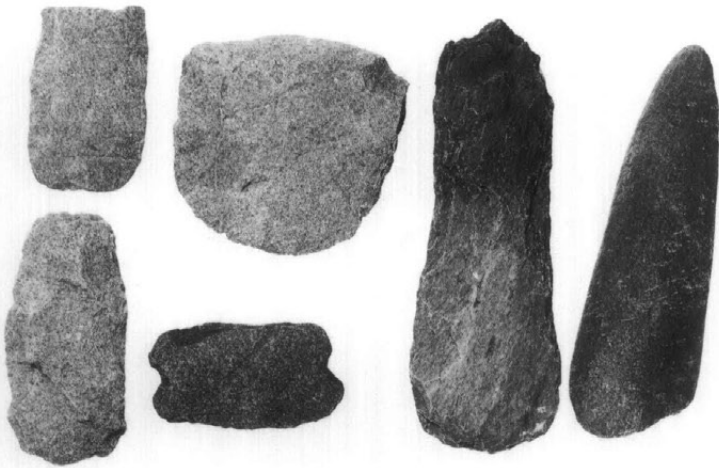
SK03.04



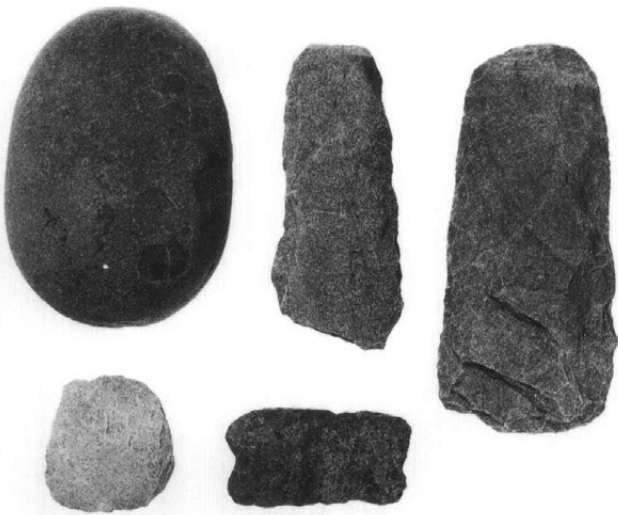
遺構外



遺構外



SB08. SB05



SK04. SD01
遺構外

報告書抄録

ふりがな		べっぷなかにじまいせき					
書名		別府中島遺跡					
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名		福澤好晃					
編集機関		長野県飯田市教育委員会					
所在地		〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼 3145 tel 0265-53-4545					
発行年月日		西暦2000年3月21日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
べっぷなかにじまいせき 別府中島遺跡	飯田市上郷別府 2241-2 他	2053	35° 32' 25"	137° 51' 15"	平成10年 6月4日～ 平成10年 8月11日	900m ²	県職員 宿舍造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
別府中島	集落址	縄文時代 弥生時代 時期不明	竪穴住居址 1軒 土坑 1基	1軒 1条 2軒 3条 3基	縄文時代 土器・石器 弥生時代 土器・石器	縄文時代前期後葉の 土器が多数出土する	

別府中島遺跡

2000年3月21日 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地

飯田市教育委員会

印刷 杉本印刷株式会社
